女鑑



東京國光社

女鑑第百三十一號

目録

衣通姫



奢侈

およそ、人、血氣盛なる少壯の頃は、氣みち、心おごりて、やゝもすれは色につき、花に染み、或は勢にはやりて、來し方行く末の空もうち忘るゝ事のみ多し。怖るべく謹しむべき事なりかし。一國の上にも亦これに似たる事あり。國運やゝ盛んに、國勢やゝ强からむとする時は、一方には、又とかくに心なき虚飾いたづらなる奢侈の風を生じ、自ら、いつしか惰弱の俗に流るゝ弊を作る事は、古より誠におかり。今や、わが國も、國運いよく〳〵めでたく、國光いよ〳〵明るく、國勢いよ〳〵盛んにして、先きつ年も弱韓を救ひ、暴淸を懲らし、大に償金を取り新に臺灣の版圖を開くに至り、東洋の强國世界の名國と稱せらるゝに至れり。我も、孃たちも誠の臣良たる者は、自ら覺らず、手の舞ひ、足の踊らん喜びにこそあめれ。然れども、悦ぶと共に、吾も孃だちもまた大に謹しむべき事あり、そは、

やかて、此の奢侈惰弱の風俗に墮落せぬ樣にと、心がくる事なり。さるま、今の世の人の衣食住の有樣を見るに、何となう覺束なく覺ゆべき風俗少なからず、やゝ奢侈虛飾に流れんとする傾向あるを、吾は覺ゆるなり。大に戒めずばあるべからず。業なり、名遂げし大人はさて置き、學をとげ、名をなさむとする少年輩、五六年前、袴短かま、羽織うすく、冬にても股だち高くとりけるなどは、此の頃は見る事なく、大方は衣長く、厚く、甚しきは酒を呑み、煙草を喫し、屈强の足を持ちながら、やゝもすれば車に乘り、うれも穢きは見苦し、遲きは心地はろしなど云ふ人々の多きげなり。されど男子の事は、此處に細に論ずべき用なければさて云はず。女子の上にのみ就きて云ふに實に心なき虛飾いたづらなる奢侈の風俗に流れむとする氣しき旣に著きものあり。此の頃學びの庭に行きかふ女子を見るに、木綿の衣つけたるは誠に稀れにて、頭にかくるものも花のでとき絹なれば、手にせるものは手拭も、洋傘も、書物を包むものも、皆うるはしき絹ものを携へ、衣服は云ふまでもあらず、はでやかなる限り、美しき限りを競ひてまとひ、たゞ

に姿容をつくり、飾り立つるを以て、朝夕學校に通ひゆく心懸けとのみ思ひたゝむやうにて、學ひの道ふみゆく誠の志を知れるものゝ少きやうなるは、いたはしく、悲しき事にあらずや。

一本の帶地に、二百金あまりをかけ、一枚の衣服に、數百金を費やす者あることとは、さる高價の帶地反物の、まさしく吳服店に用意せられたるを見て明に知るべき事なり。これはかりにても、世の奢侈に赴きたる証とするも、決して誤らざるべし。

富貴なるものは奢侈を極むるも、格別の害とならざる樣なれど、美は皆人の欲する所、一人美を裝ふ時は、五人そまり、三人習ひ、いつしか百人千人終には國中にあまねくつたはりて、之が爲に苦しむものゝ數多になりなむ。此の頃ある册子を見たりしに、奢侈より生じたる大弊害こそあれ。そは、外國品の買ひ過ぎなりと、昨廿八年までは、我が國と外國との交易、大方はおなじ高にてありけるを、去年より俄に、殊の外に多くなりて、僅か六ヶ月の間に、三千三百萬圓も外國品を多

分に買ひ過ぎたりとぞ。嗚呼おそるべし、限りある財貨を、さはかりに外國に散らしはてなは、わが輩、實に覺束なくおもふ事大からさるを得ず。女子は、身のまはりの見苦しからむことを心かけたしなまさるべからず。されぞ、此の女子のたしなみ、虚飾奢侈とを混じ誤つべからず。これ大に異るものなり。そは嘗て諸孃につけたることとあれば云はず。兎に角に、目下の女子の風俗には心なき虚飾いたづらなる奢侈の流行するものあり。誠に國家の一女子たる道を敎へむと思ふもの、誠に國家の一女子たる道を學はむと欲する女子は、まづ此の奢侈の危き道を習はしめぬやう、習はさるやう、大に注意せさるべからず。

やまざくら
ちるを見てこそ
思ひしれ
尋ねぬ人は
こゝろありけり

（仲綱）



論説

我が國民の身體

齊木文夫

我が國民の身體は、日に〳〵羸弱に赴くと云ふにはあらねども、歳々年々人不同ことは、博物館に遊ぶ者克く之を知らん。古代の甲冑が如何に逞くして、弓箭、刀劍が如何に魁偉なるや、舊墳古墓より發掘せし雄大魁梧なる骨骸を有する者、今將に幾人かある。力士社會には、時として比類すべき者なきにあらねども、一般を通觀すれど、其の力量其の體格、到底古代に及はざるなり。退て之を動物に考ふるに、山峽海濱より堀出せる骨骸中には、間々象鯨も三舍を避くべき者なきにあらず。若しも、雄大より矮小に赴くは、生物進化の自然なりとせむ、男子すら、尚西洋の婦女子よりも短矮なる體格を有する我が國民の進化は、推想するに餘あるべし。若、又、空想家の信ずる如く、自由に針の穴をも通過し得る小人國ありたらんには、之こそ進化の最上なる者なるべけれ。否、理論の順序としては、アトーム（極細微分子）的人間を想像せずんばあらず。

愛に至りて、人間の先途も亦憐れと云はざるべけんや。

夫れ、生死は、生物の免かれざる處。アトーム的人間、果して生あるべきか、又死あるべきか。優勝劣敗を生物進化の大則と假定するときは、優勝の地位に立たん者は、必ずアトームとなり終らんことは、克く首肯するを得べきか。且、アトームと云へど、已に生物組織にあらず。故に生死あるべき筈なし、已に生死なし、殆と之れ佛者の希望する最終の彼岸なれども、古來未だ嘗て此の地位を踏みし者なし、遺憾ながら、人間今日の境遇に於ては、身體の複雑的組織を、他の動物に勝れりと斷念せざるべからず。優勝劣敗を進化の大則と覺悟せざるべからず。

社會は優勝劣敗なり。此の社會に立て、優勝の地位を占んには、之が覺悟なかるべからず。健全の精神は、健全の身體に存する者なれど、多病、藥籠を手にするの才子を養成せんより、寧、活潑敢爲の國民を望まざるべからず。身體父母の如くにして、僅に健康を保續するの人ならんより、寧、藍より出でゝ藍よりも靑き者を所望せざるべからず。假令助長せざるまでも、責ては、國民の羸弱を防ぎ、世界無比の皇國をして、いや榮ゑに榮ゑしめんは、吾人の天職なり、幸にして、我が國民は、一方に増加の現象あるのみ、若しも、風俗頽廢して、佛國の如く、日に減少に趣くことあらんか、前門狼

を防ぎ、後門虎を禦ぐの恐慌あらん。陰雨せざるの綢繆尤も必要なれ。

西人、我か國民を評して、頭腦の國民といふ。手足發達の割合よりも、頭腦の厖大なるは事實なり。時として、古代の肖像、今に現存する者、全く頭脚たる者なきにあらず、到底偶然に出でたりとは想像し能はざるなり。未來の母たらん者、如何の心懸かある。頭腦のみの人、立つ能はさるは論なし、手足のみの人、亦、働く能はざるなり。「大男總身に智慧は廻りかね」とは、克く穿ち得たる説にあらず。智慧の總身に回りたる、大々的大和民族を養成せんこと、之ぞ母の務なれ。

然るに、今の女子教育を見るに、花顏柳腰深窓に成長し、纎手曾て椀より重き者を擡けず、虚脚曾て數歩の外を踏まず、出づるに馬車あり、入るに人車あり、食少なきを厭はず、体瘠せたるを嫌はず、纍々喪家の犬の如くして、人も羨み、我も亦得々たるは、悲むべきにはあらさるか。之が未來の母たるを思へば、轉悽愴の情に堪へさるなり。若、遺傳の原則をして眞ならしめば、かゝる母を戴ん子ぞはかなけれ。

女子は、決して、沈鬱厭世の一塊物にあらず、活潑は其の天性なり。假令、助長せさるも、抑壓すへき者にあらず。然るを、活潑とれ轉婆とを混同し、優美と生意地なしとを同視したる結果は、女子の体育を忽にするに終らんとす。近來、高等小學以上の女

子に、体操を課せざる傾きあるは、他に特別の理由ありて、体育を蔑にするにあらずとはいへ、之をしも喜ぶべき現象といふべきか、然れども、吾人は、決して、極端に体育を主張する者にあらず。体操のみ滿點にして、裁縫家政に零點を得るも差支なしといふにはあらず。只、未來の健全なる國民を得んことを希望すればこそ、体育を主張するなれ。

見よや、春日の局を、共に竹馬に乘り共に跳躍奔馳して、時に友となり、時に師となりて、訓陶鍛練せし、靈明豪放なる英物は腕白なりし竹千代にはあらざるが。德川三百年の源泉は、亦是れ頑是なかりし竹千代にはあらさるか。如何に苦慮痛心せむとて、瓜の蔓に茄子は得難き者なり。然るに、教育の如何によりては、家光の如き英物亦得難きにあらず。故に、古代の支那にも、胎教と云ふ者存じ、烈女傳には、實に左の如く云へり。

古者。婦人妊子寢不側。坐不邊。立不蹕。不食邪味。割不正不食。席不正不坐。目不視邪色。耳不聽淫聲。夜則令瞽誦詩。道正事如此則生子形容端正才過人矣。

之れ、一に、才、人に過ぐる者を得んとする爲の教育たるに相違なきも、一には、形容端正なる偉人を得んことを希望するに由らずんばあらず。嗚、數千年の昔にして、生

子の身体に望むある此の如し。況んや、烈國對峙の中に在りて、優勝の位地を占んとする者に於いてをや。

今や、春陽駘蕩、花笑ひ鳥歌ひ、柳絲婀娜人を招く。行け飛鳥の山、小金井の堤。一年の健康を養ふは正に此の時なるべし。若も、終始箱入娘たらんが、未來の國民に影響せんことを恐るゝなり。

女子教育一斑（三十九）

三輪田眞佐子

第七境遇　こは、單に、德育、及び智育にのみ影響するにあらずして、體育にも少からざる關係を有するものなり。玆に境遇といふは、土地、氣候、職業、貧富、及び家庭の有樣など、一切女子の身體に變化を及ぼすものを指すなり。たとへば、印度は熱帶國なればにや、女子は、その身體、男子よりも早く熟して、しかも早く衰ふるとかや、亦、貧者は過勞のため健康を害し、富者は遊惰のため强壯を破るとぞ。されど體育に關係ありとて、越の國人、その鄕を去りて、筑紫に移らんは難し、且、衛生上必要ならんも、貧者は滋養分多き食物を求むる能はず、富者も適度の勞をなす機會な

かるべし、故に、かゝる境遇上のことは、及ぶ限り害に遠ざかるやうつとむる外ぞなかるべし。全然理論のまゝに實踐することは、さながら、泰山を挾みて北海を越ねんが如し。

さりながら、境遇の中にも、長者のために枝を折るばかり易きことは、家庭の有樣を改良するにあり。見よ、女子は位を内に正すべければ、先づ家屋の構造上、空氣の流通よからず、光線の射入あしき時は、おのづから、これに住む婦女は、健康を害することを免れず。わきて、家風の如何によりて、衣服、飲食の衛生的なると、然らざるとの差別を生ずるなり。思はざるべけんや。これに反して、家庭によく規律行はれて喫食の時間を正しくする如く、朝は早く起き、夜は相應なる睡眠をなすときは、知らず、識らず、健全に趣くならん。その他、飲料水の良非を撿べ、邸宅の淸潔法を能く行ふなど、家庭の境遇を撰ばざるべからず。

第八婚姻　人は、生物一般の天性に基き、成長、成熟、及び老滅の時期を經過するものを、成長の時期に當りて結婚するは戒むべきことにこそ。若、この天法を犯さんか母自ら充分の發育を遂ぐる能はざるのみならず、その生るゝ兒童は、必ず完全なる人とならんは難し、これ、全く、母子の不幸にして、施いて國家の元氣を滅殺する緒な

らんかし。

然かるに、世の人情を察すれど、娶るものは、容色の美をのみ尊ぶより、二八の少女を好み、嫁かしむるものは、一日も孃妹を處置すべき苦慮を遁れまほしう急ぐこそ、早婚の弊を生ずる原因なれ。滿十五才以上の結婚は、國法の之を制裁する處にあらざれども、しかも、身の健全を考へ、兒の強壯を思はゞ、須らく、丁年に達して結婚するをよしと覺悟すべし。

餘事ながら、血族近きものゝ相互に結婚するは、直接には害あるを聞かざれども、間接には子孫の身體、并に精神さへ完備せざるもの多しとかや。されど、これも愼むべきことにこそ。

第九休養　總て物は分量に定限あるものなれど、人の身體も、その勢力を消費するに從ひて、これを休養せざるべからず。然るに、女子の業務は定律なきを以て、休息するにも規律なし。故に、休養の心得もあるべきなり。

况して、女子の體質は、嬋娟なるにより、男子の如く、過激なる勉學などをするときは、健康を害ひ、子孫にさへ遺傳するを以て、過度に身體を用ふべからず。若、非常に身體の健全を破り、遂に顏色蒼然たる女子とならんには、幸福を求めんとて修めし

學問、反りて身の仇ところなれ。

以上の條件を參酌して。女子の體育を施さば、その結果聊か見るべきものあらん。元來、女子教育は、本然の美德を磨き、これと相待ちて、完全なる生活を爲し得るため有益なる智識を養ふべきものなれど、體育は、教育の本體にあらざるも、唯精神に影響するを以て、教育の方便となすに過ぎざるものと知るべし。然かも、識念一度道義を悟らんには、直に德育の目的を達すべく、智育も多く學ばんには、遂にその志望に近くべしといへど、獨り體育に至りては、智德を研究するため健康の害せらるゝ恐あるのみならず、一朝健康を破らんときは、回復すること容易ならず。なほ、健康は、他人より授け難きものなれど、女子自ら工夫すべきなり。

春ごとに
花にこゝろを
なくさめて
さしふりまさる
みなかみ思はず



史談

衣通姫

鹽井ふく子

和歌三神の中にかずまへられて、名にし負ふ和歌の浦にしづまり給ふ玉津島神。在りし世の名は衣通姫とて、そのうるはしさ、世に類なく、そのはだへ玉の如く、雪の如く、幾重衣を重ぬるも、光りなほ衣を通りてかゞやくと云ふ意より出でぬと聞くもめでたし。其の弟姫といふは、允恭天皇の皇后、忍坂大中媛命の妹なれどなり。天皇御位につかせ給ひてより七年十二月のある日、新につくられし臺にうたげしたまひ、親ら御琴を撫し給ひ、皇后起て舞ひ給ひぬ。舞ふ事既に終りて、皇后禮事を申されず。當時の風俗、舞ふもの舞ひをはれど、座長にむかひて、娘子を奉らむといふが禮なりけれど、天皇、皇后に對ひ給ひて、何故に、常の禮を失へるぞとの給ふに、皇后かしこまり、てかさねて舞ひ給ひ、さて娘子を奉らむと奏するに、天皇、その奉る娘子を

誰ぞやと問はせ給へど、皇后やむことなく、妾が妹弟姫を奉らむと更に奏しぬ。これは、皇后、日來、天皇が弟姫をれぼし給ひて、強ひて皇后をして進めしめんとし給ふを知るを以てなり。

天皇これをきゝ大によろこび給ひて、明日直に使者を遣はして、弟姫を迎へ給ひぬ。

弟姫母に随ひて、近江國坂田と云ふ處に來りは來りたれど、皇后が情に畏れて、參りのぼらで、たゞ坂田に留り居りぬ。

天皇はとく見そなはさまほしう、切に喚び給ふ事七度八度に及べども、弟姫なほ固く辭みて上らざるに、天皇よろこび給はず、たま〳〵一人の舍人、中臣烏賊津使主に勅して曰く、皇后が進むる所の娘子弟姫、喚べども〳〵まからず、何が故ぞ、汝自ら行きて、弟姫を將て上れ、必ずあつく賞せむとの給ふに、烏賊津使主かしこまり、命を奉じて朝を退き、家に歸りてまづ糒をつくり、裀の内に藏め入れて、明日坂田にいたり弟姫が居るときく宿にたどりつき、庭中にひれ伏し、つゝしみて君が詔命を傳ふるに、不德の身をさむかり深くよそむとし給ふ　天皇の御心かしこくともかしこく侍れど、唯皇后が御心をいためまつらむ事のいとはしく、かくは心ならず御命に背き奉りぬ、妾たとへ、如何なる罪をかうぶらんとも必ず參赴せず、此のよしよろしく奏し給

はん事をとて、固くとつて動かざるに、使主また申すやう、われ、帝王より汝行きて必ず以て上れとの仰せ、かしこみてかく參りたるに、今その使をはづかしめて歸らむは、天皇に對し奉りてもゆゆしく、何の面目ありて、君にあひ奉らん。もし、われ面目を忍びて歸り參しなむ、天皇いがむかり甲斐なくればして、さこそは罪したまはめ。われ面目をそこなひ　かつ極刑を被りて、耻の耻を見んよりは、寧ろ此の御庭に伏して死せむのみとて、七日、七夜、庭中に伏して、飲食ともに廢して、固く使を守りて、之もまた動かず。されど、ひそかに用意したる懷中のほしいを食ひて、からく玉の緒をつなぐとも知らぬ弟姫は、舍人が此のさまを見て、忍びかねく思ふやう、妾皇后の嫉みを恐れ、かしこくも天皇の命を拒み、ましてかくむかり赤き心を盡くして使へんとする忠臣を、妾故に亡ばさんはいとをし、かなし、よし此の身は如何にねたまるゝとも、やんごとなき天命に從はんものをと思ひ返し、思ひ決し、則、使臣に此の由を對へて、赴く事とはなりぬ。

かくて、使臣まづ京に至り。弟姫を倭の直吾子籠の家に留めて、事のよしを復命せしに、天皇大によろこむせ玉ひ、厚く使主を美め給ひて、衣などかづけ給ひぬ。皇后此の事をきかせ給ひて、よろこむざるに、天皇も宮中に近づけ給はず、別に殿屋を藤原

にしつらひて、弟姫をすまはせ給ひしかど、皇后が平かならぬ色の見えけるに、いたづらに御幸遊ばされず居給ひぬ。折りしも泊瀬の天皇の生れましゝ夕に、天皇はじめて藤原の宮に御幸ましゝけるに、皇后恨み給ひて曰はるゝやう、妾初めて結髪せしより後宮にそへる事多年、さるを、今、妾、子を生まんとする今宵此の死生のさかひにわたり、藤原へましますとはあまりなるかなしき御振舞ひかなとて、自ら産殿をやきて、死なんとせられしに、天皇これをきこしめして、大に驚き給ひ、朕あやまてり〳〵とて、速に大宮にひきかへし給ひ、皇后の意をなぐさめられけるとぞ。

その後しばらくして、藤原の宮に御幸ましゝしに、その夜、衣通郎姫、天皇を戀ひ奉り、獨り高殿にながめ給ひて、天皇の臨幸をも知らず。

　わがせこがくべきよひなりさゝがに(佐々蟹)の
　　くも(蜘蛛)のおこなひ(行)こよひしるしも

とよみ出でぬ。天皇此のうたをきこしめし、あはれにおぼし、

　さゝらがた(佐々貫形)にしき(錦)のひも(紐)をときさけ(解下)て
　　あまたはねず(多不寢)にたゞ(只)ひとよ(一夜)のみ

と、歌ひかへし給ひつゝ、うち入り給ひて、げに日來、夜來、思ひあかし、思ひくら

し給ふ事々語りつゞけ給ひ、あくるあした、井のほとりの櫻の花を見そなはして、

はなくはしさくらのめにことめには
はやくはめてずわがめづるこら

と、歌はせ給ひし事々、皇后きこしめして、大に恨み給へり。衣通姫は姉姫が心をくみ給ひて、一日天皇に奏するやう、妾は誠に君が御心の有りがたく、常に大宮に近づき奉りて、晝夜陛下の威儀を見まほしうとまで思ひ侍れども、如何にせむ、皇后は妾が姉なり、妾故にいつも心をくるしめ、妾故に君を恨みまつりぬ。ねがはくば王宮を離して遠く居らしめさせたまへ、さすれば姉の心も休まり、君も恨まれ奉る事もたね侍らん。此の事叶へさせ給へと奏せしに、天皇も尤とや思ばしけん、八年に、更めて、宮室を河内の國茅渟と云ふ處につくりて其處に移らしめぬ。

是に於て、天皇しば〳〵日根野に狩り遊ばして、以て茅渟の宮にたちより給ひぬ。九年二月こゝに御幸ましまし。秋八月また御幸し。十月また。十年正月にも御幸し。三月また御幸す。皇后奏し給ふやう、妾毫毛も弟姫を嫉むには侍らねど、さやうに、屢茅渟に御幸遊ばされては、百姓いたく苦しみ侍らん。願くば車駕の數を除き給ひて、百姓をやすめやり給ひてと奏されしに、天皇また茅渟への御幸まれ〳〵になり給ひぬ。

せきにせかれて、明年春三月御幸ましく／＼しに、流石女心、衣通郎姫も年來、月來、久しうあこがれ奉りし折りから、思はず、

とこしへにきみもあへやもいさなとり
うみのはまものよるときく／＼を

と、諷はれしに、天皇姫に向はせ給ひて、そのうた他人になきかせうと仰せられしを、皇后もれきゝ給ひて、いといたう恨み給ひしとぞ。故に、時の人、濱もの事を、なのりそもと呼びなしゝとぞ。これより先き、衣通郎姫、まだ藤原におはせし時、天皇大伴室屋連に勅して曰く、朕、此の頃、美麗なる孃子を得ぬ、それは皇后の妹なり、朕實に之を愛す、冀くはその名を後の世につたへましう思ふなり。如何にぞやと仰せられしに、室屋連、かしこまり、しかよろしかるべしと奏し奉りて、則、諸國の國造等に科して、姫の爲めに、藤原の部を定めしとぞ。誠に姫のうるはしかりしことは、千古の一人とたゝへられぬ。されど容色は末のみ、心柄やさしう、よく歌などよみて、後世永く和歌の三神に列しぬることそたふとけれ。

まんこ

三矢重松

元文の頃、羽前の國、庄内鶴岡の西南八里ばかり、温海村といふ所に六左衛門といふものありけり。年頃病身となりたるうへ、目さへ盲ひぬれば、何事もなせず。子供二人あれど、皆、病身にて用に立たず。老母あり。これも若きをりは、耕作などにまめなりしかど、はや、八十九歳の高齢なれば、することもなし。たゞ、六左衛門妻まんこ一人の働にて、家内を養ひ、老姑に事へて至らざることなし。姑、常に生魚を好む。まんこ毎日濱邊にいたりて魚を求むるに、その所になき時は、越後より歸る獵船を待ちつけ、母の好めるもの一つ二つを得てすゝむ。姑、また食するごとに、砂糖、飴など無ければ箸をとらず。まんこ、此の料には、若布、海苔などの類をとりて錢にかへ、城下に便あれば、之に托して砂糖と飴とを求めれき、かつて姑の好む所を欠かず。漸く年たけては、老耄して、不時の物を好むこと度々なるに、まんこ之を辭ます。或る時は、雪中に、ところ、百合などを求め、又ある時は、夜中に俄の好により、松明てらして山中に入り、山の芋を求む。姑、また歩行むづかしくなりしに、頗、風呂を好めば、村中をかけまはり、旅人など泊れる宿あれば、風呂の末を所望し、姑を負ひ行きて湯に入れしが、其の後は、身體いよ〳〵不自由となりぬれば、家の内にしつらひて

湯をつかはせ、厠所なんど、萬事姑の心の安からんことをおもひ計る。六左衛門所持の田、高三石八斗のところあれど、甚惡き場所にて作徳なし。その他、少々の山畑あり、皆まんこ一人の耕作なり。あけくれ姑の側はなれがたうれもへど、外に人なければ、毎日稼にいづるに、糧を持たず、午時には宿に歸り、姑の機嫌を伺ひ、食事して又いづ。もし、又、いづるところ近ければ、幾度もかへり來りて、安否を伺ひ用を達す。されど、姑も、まんこを愛し慕ふこと尋常ならず。かゝる事ども次第に世に聞えて、延享元年五月、上より厚く賞せられけりとぞ。世に孝婦といふきはあまたあれど、姑に事へてかくまめなるは、昔も、今も、多く聞かざる處なり。

花のゆふばはな、すこしゑひにのりて見るも、こゝに、色まされる心地ぞすなる。花に醉し月にゑひて、二ながら、かれたる樂、春宵一刻値千金、花有二清香一月有レ陰といふ詩を思ひ出でられぬ。又、惜レ花春起早、愛レ月夜眠遲といへり。古人は、かくこそ月花をめでしに、今の人の、あたら夜の月と花とにそむきて、むなしくふすは、いとをしむべし。又、夜の間の風のうしろめたきをもしらで、朝おくることおろきは、花を惜しまざるなり。

（貝原益軒）



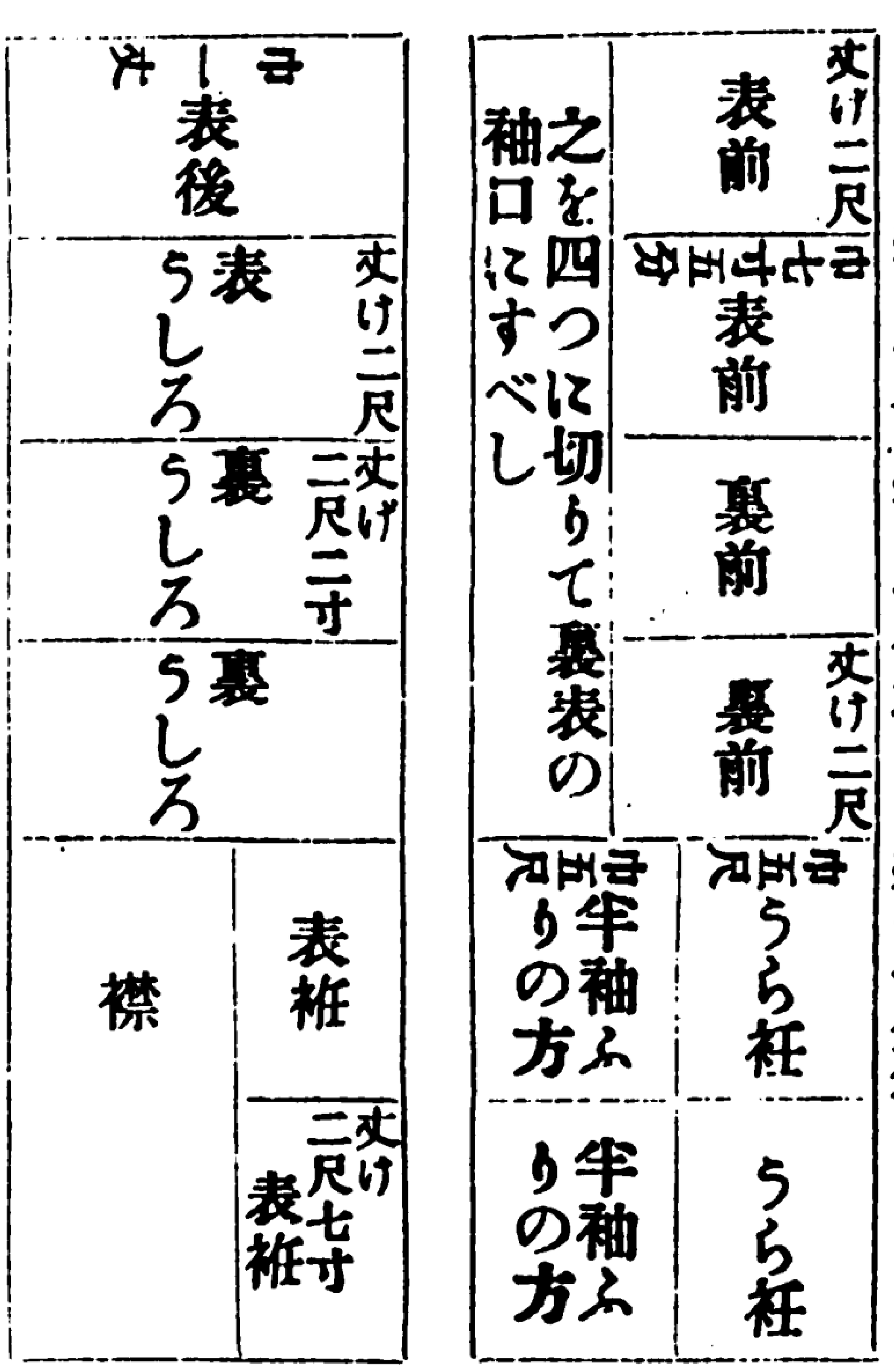
たちぬひ

西山たい子

（六十八）無垢比翼下廻りの裁ち方

之は裲は外の切れにてたゞ一枚に、裾の方だけ無垢にて、二枚にするなり。比翼とは鳥の翼の如く、一つ裲より二枚出でたれどさる名を負はせしなり。之は、切の都合によりて寸尺も異なれど、此處には並巾ならば五丈六尺ばかり、大巾ならば三丈ばかりにてたゝんとす。

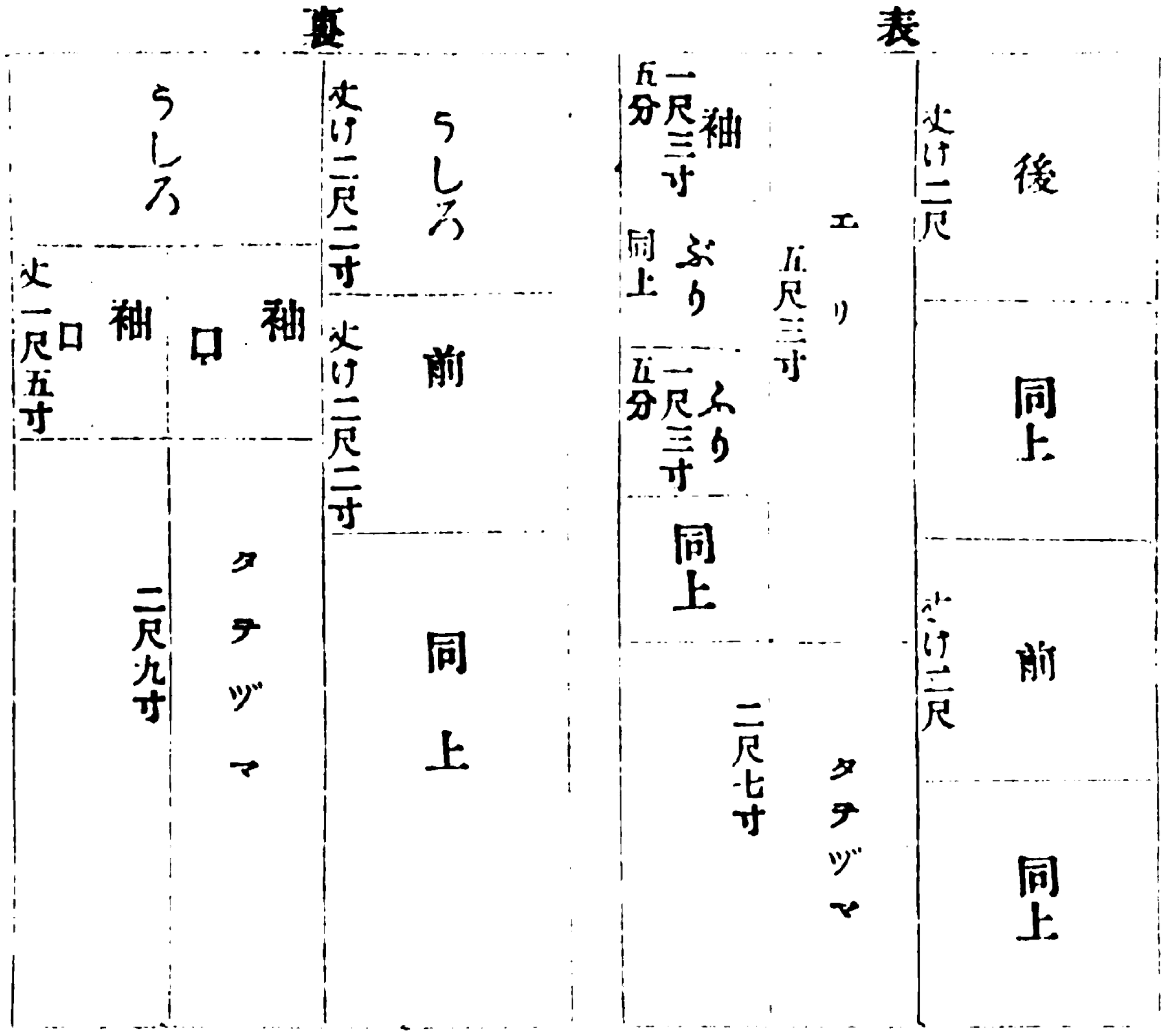
並巾にての裁ち方



総計二丈八尺

之と同じものを今一つ裁つなり

大巾にての裁ち方



總計一丈四尺八寸

之と同じものを今一つたつべし

たち方まださまざまあれど大方はかくの如くなり縫ひ方は此次に申さん。

造花

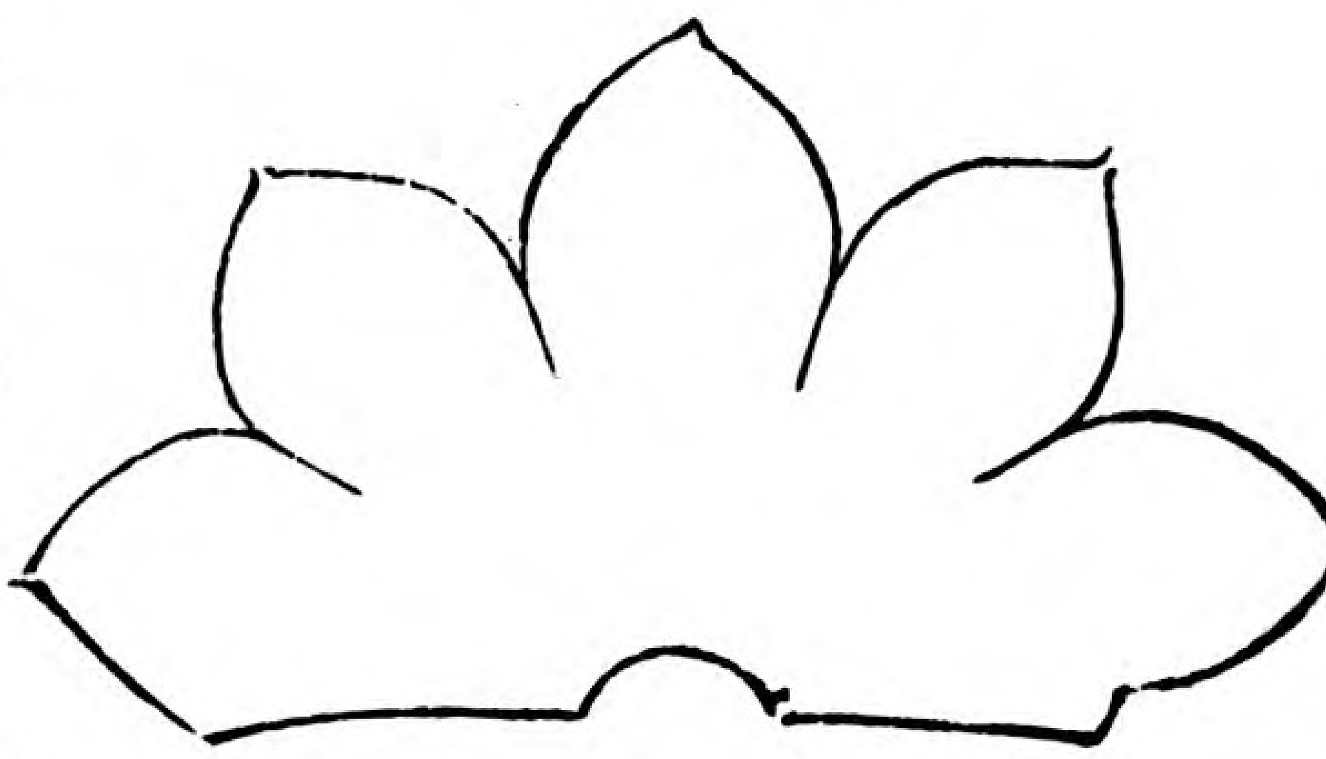
共立女子職業學校教授
伏見藤三郎

霧島

滿開花の造り方　花瓣は、羽二重、又は寒冷紗を用ゐること例の如し、白き花を造るには、其儘にて、第七十三圖の形に斷ち（紅のものは、「フロクシン」にて下染を爲し、形に斷ちて后「スカレット」にて、花瓣の先を濃く元を薄く模糊す）菊鏝の小にて、各花瓣の眞中を表より縱に引き、后、裏返して、各花

瓣の兩端を、小の瓣鏝にて圓味を着け終りて、花瓣の甲端を乙端に糊にて着け、之を萼に着く。萼は、第百十九號に示したる櫻の萼と仝じ様にして青紙を以て小く造るなり。

第七十三圖



甲端
乙端

蘂は、二十番のかたん糸を「スカレット」にて少しく薄赤く染め、后、薄糊を引きて乾かし、之を花瓣と仝じ長さ位に斷ちて五六本を束ね、先に糊を付けて、菓子種、又は落雁（菓子の名）を、薑擦にてれろしたるものを着け、花瓣の中部に糊をつけてさしこむべし。

半開花の造り方　は、滿開と異ることなけれど、唯花瓣は、眞中を菊鏝にて引きたる儘にて、滿開よりも小く纏むれど可なり。

蕾の造り方　は、羽二重、又は寒冷紗（紅のものは滿開の如く色染）

第七十四圖



にて第百十九號に載せたる櫻の蕾と仝じ樣にして細長く造り、尙は之れを縱に少しく捻るべし。

葉は、寒冷紗を「オウラミ」五分「グリン」一分五厘「マセンダ」五厘を混ぜ溶し、之に明礬小許を加へたるものにて染め、實物に合して形を取り、裏より針金に青紙を卷きたるものを着けて葉柄とし、筋鏝にて實物の如く筋を着くべし。

枝は巽に竹を入て、之に「カシトラバル」にて染めたる美濃紙を卷き、適宜に纏め造るべし。第七十四圖參照。

だいどころ

牡蠣の牛乳蒸

新鮮なる牡蠣三合を其液汁の中に浸し置き、「シチー」鍋に牛乳一合を投じ、牡蠣を其中に入れ、鹽加減をなし、火にかけ、十分間程蒸煮にしたる後、之を、皿にわけ、さいの目にきりたる燒パンと、細かに刻みたる洋芹少許を加へて用ふべし。

赤茄子の蒸方

赤茄子を細かに刻み、（一人前二つ宛シチー鍋に投れ、能程の胡椒、食鹽を和し、水少しを投し、一匙の牛酪を落して、文火にて焦つかざるやう、二十分間程蒸たる頃、酢一匙を注して、又五六分間煮たる後用ふべし。

白豌豆の蒸方

白豌豆を三合程、能洗ひ、こまかにきざみたる玉葱一個をまぜ合せて、「シチー」鍋に投れ、其中へ大匙一杯の牛酪を落し、能程の胡椒と、食鹽とをふりかけ、豆の隱るゝ程水をさして、一時間程、文火にて

徐々と蒸煮にし、（こげつかざるやう注意すべし）夫れより、鶏卵一つを落し、砂糖一匙を加へて能くまぜあはせ、二三分間經たる後、火よりおろして用ゆべし

胡瓜の蒸方

胡瓜二三本の皮をむき、之れをはすぎりになし、志んを去り、球葱一個を細かにきざみ、胡瓜と共に「シチユー」鍋に投れ、スープ二合を注して、火にかけ、其沸騰ちたる時、鶏卵の蛋黄一個と、大匙一杯の牛酪を落し、又きざみたる肉豆蔻と、蕃椒少量を加へてよくかきまぜ、凡そ十分間程、蒸煮にして用ふべし。但し此等の蔬菜類は、肉類の脇付に用ふるものなり。

生推茸の焼方

大なる生推茸を、布巾にて鹽みがきになし、焼鍋の

中に別々に入れ置き、ひとつごとに牛酪を落し、其上に胡椒をふりかけ、十四五分間程よき火にて焼くべし。

山葵の粕漬　山葵の皮を去り竪に薄く切りて鹽にて壓し一夜置て水氣を取り竝か桶に酒粕を入れて漬け其器の口を密封し十數日を經て用ゆべし酒の肴御茶漬のさいなどに中々趣あり



漢文學講義（六）

大林弘一郎

四、遊瑞龍山

細川潤

潤、字は潤臾、十洲と號す、通稱は、潤二郎、土佐の人、今、東京府士族は貫屬せり。

渡久慈河、經磯部、遂於太田驛、驛距縣署五里餘、有戸千餘、午飯於一店、托行筒於其家而出、蓋用車上山徑不可、不加輕也、先上瑞龍山、山在驛北半里許、爲水戸侯歷世兆域、山麓之村、仍稱瑞龍村、行盡處見墓門、屹立、門之左有一老屋、守墓者所居、余先告以姓名、求人概、一人前導而進、入門內、右邊有庫、爲藏先侯遺物處、歷世之墓、各爲一域、散在一山之上、磴道繚繞、穿松林而上下、公及夫人同域異墳、公墓馬鬣封、夫人墳頭封、俱用堊、余思堊性不耐寒、經冬輙多酥褪、蓋以歲時修補之耳、碑面書爵官謚號、上刻雙龍、承以龜趺、碑之外、悉甃以石、繞以木欄、大抵方六七步、其下亦甃石爲壇、可歷磴而登、義公則別有壽藏碑、作亭覆之、別有諸公族墓、自成一域、又有明人朱之瑜墓、碣面題曰、明徵士子朱子墓、義公所書、環刻墓誌、門人安積

濃泊所、撰観畢下山、再至太田、（近游日鈔）

此の文の如きは、紀行にして、即、記事文の一躰なり。細川氏嘗て茨木、群馬などを巡遊して、近游日錄といへる日記一卷あり。こは、その中につきて、一節を抄出したるなり。

常陸の久慈河を渡り、磯部といふ所を經て、太田驛といふにつきたり。この驛は、茨木縣廳のある水戸を距ること五里餘にして、戸數千餘もあり。署とは役所といふ心なれど、廳の字にかへて用ゐたるなり、さて中飯の時なれど、或る一の店にて午飯を食し、行笥、即、旅行用のカバンなどをその家に預け置きて出で立ちぬ、こは、けだし車にて山路を上る故に、なるべく重みを少くせざるべからざるゆゑなり。輕きを加へざるべからずと書ける所、輕きが上にも猶輕くする様子見えて面白し。

かくて先、瑞龍山に上れり。この山は、太田驛の北の方半里ばかりの所にありて、水戸侯歴代の墓所のある所なり。兆域とは、墓地といふことにて、兆は墓の界域をいふ、故に古く孝經などにも宅兆など用ゐて、墓所のことにいへり。

この山を瑞龍山といふ故に、山麓にある村も瑞龍村と稱す。路の行き盡くる處に、墓所の門の屹として立てるを見たり。この門の左に一の老屋、即、古びたる家あり、この墓守の居る所なり。余、先、姓名を告げて、入りて墓所を觀んことを求めければ、一人前導して進めり。門の内に入れば、右の傍に庫あり、この庫は、先侯の遺物を藏め置ける處なり。

さて、歴世の墓は、皆、各、一つ一つに區域をなし、山上所々に散在せり、磴道は石壇なり。石を敷き

て道となし、この道が、繚繞即めぐり〳〵て松林の中を分ちて上り下りせり。

公の墓は、馬鬣封とて馬の立髪の樣に土を高く盛り封じ、夫人の墓は饅頭封とて、圓く土を盛りたるなり。兩方ともに白堊を用ゐたり。余思ふに、堊の性は、寒にたへざるものなれど、冬を經ど、多くは、酥褪し、碎け毀るゝものなり。蓋この墓は、時々修補する故に、毀るゝ所なきのみと、碑の面に爵、官、諡號を書したるは、賴房卿の碑に、水戸侯故正三位權中納言源威公墓と書し、卿の妾の碑に、靖定夫人谷氏墓と書し、西山公の北の方の碑に哀文夫人藤原氏墓など書されたるこれなり。上に雙龍を刻み、下の臺石は、龜の形に作りて、碑石を帶びたり。趺は臺石なり。碑の外は、悉、甃(イシダヽミ)むに石を以てし、その周圍に木の欄を作りて繞らしたり。大抵大さは方六七歩ばかりにして、その下にもまた石をたゝみ壇をなし、磴を登りて行くべき樣になしたり。さて義公のは別に瘞藏碑とて、在世の時に自建てられたる碑あり、その下に公の衣冠を埋められたりといふ。この碑は自その文を撰して立てられたるものなり。この碑には屋根をかけ覆ひをなせり。また別に侯家一族の墓所ありて、自一區域をなせり。またその傍に別に明の風に作りたる墓ありこれは、明人朱子瑜の墓なり。碣の面に、題して、明の徵士子朱子墓と表るせり。これは、明の浙江の人朱之瑜を義公が招聘して師とせられたれど、その卒せし時自碑面にかく題せられたるなり。徵士とは、明の遺臣故に淸の朝になりて歷徵されたれども、出て仕へずして、日本

に歸化したる故に徵士とかゝれたるならん、支那にても徵士とかけるは、かゝる高義の士人をいへるにて、晉の陶淵明を晉の徵士とかけることあり。これも、晉の遺臣故、宋に仕へざるよりかくいへるなり。子朱子とは子は尊ふ語なれど、朱子といふ上にまた子の字を加へていへるなり。子程子、などかきたる例あり。さて、この碑の横面より後へ環りて墓誌文を刻せり、これは、朱舜水の門人となりし安積澹泊齋覺兵衛といひし人の撰びし所なり。安積は義公に仕へて彰考館にありて大日本編纂に與りし有名なる人なり。觀畢りて、山を下り再び太田に至りぬ。

抑この瑞龍山を墓所に定められしは　賴房卿の時の事なりといへり。且義公儒禮をもて、葬祭をなされし故墓制も、かく一種の制を立てられたるなり。

世をてゝ山に入る人山にても
なほうき時はこゝをたづねよ
（德川齊昭）



雨月物語

吉備津の釜（つゞき）

上田秋成

正太郎今は俯して黄泉をしたへども、招魂の法をももとむる方なく、仰ぎて古郷をおもへど、かへりて地下よりも遠きこゝちせられ、前に渡りなく、後に途をうしなひ。晝はしみらに打臥て、夕〳〵ごとには壠のもとに詣て見れば、小草はやくも繁りて、虫のこゑすゞろに悲し。此秋のわびしさは、我身ひとつぞと思ひつゞくるに、天雲のよそにも同じなげきありて、ならびたる新壠あり、こゝに詣る女の、世にも悲しげなる形して、花をたむけ水を灌ぎたるを見て、あな哀れ、わかき御許のかく氣疎きあら野にさまよひ給ふよといふに、女かへり見て、我身夕〳〵ごとに詣侍るには、殿はかならず前に詣給ふ、さりがたき御方に別れ給ふにてやまさん、御心のうちはかりまゐらせて悲しと潸然となく。正太郎いふ、さる事に侍り、十日ばかりさきにかなしき婦を亡なひたるが、世に殘りて憑みなく侍れば、こゝに詣ることをこそ心放にものし侍るなれ。御許にもさこそましますなるべし。女いふ、かく詣つかふまつるは、憑みつる君の御迹にて、いつ〳〵の日こゝに葬り奉

る、家に殘ります女君のおまりに歎かせ給ひて、此頃はむつかしき病にそませ給ふなれど、かくかはり**するらせて、香花をはこび侍るなりといふ。**正太郎云、刀自の君の病給ふもいとことわりなるものを、そも古人は何人にて、家は何地に住せ給ふや。女いふ、憑みつる君は、此國にて由緣ある御方なりしが、人の讒にあひて領所をも失ひ、今は此野の隈に侘しくて住せ給ふ、女君は國のとなりまでも聞え給ふ美人なるが、此君によりてぞ家所領をも亡し給ひぬれとかたる。此物かたりに心のうつるとはなくて、さてしもその君のはかなくて住せ給ふはこゝちかきにや、訪らひまゐらせて、同じ悲みをもかたり和さまん、倶し給へといふ。家は、殿の來らせ給ふ道のすこし引入たる方なり。便りなくなせど時々訪せ給へ、待侘給はんものをと前に立てあゆむ。二町おまりを來てほそき徑あり、こゝよりも一丁ばかりをあゆみて、をぐらき林の裏にちひさき草屋あり、**竹の扉のわびしきに、七日あまりの月のあかくさし**入て、ほどなき庭の荒たるさへ見ゆ、ほそき燈火の光り窓の紙をもりてうらさびし、こゝに待せ給へとて内に入ぬ。苔むしたる古井のもとに立て見入るに、唐紙すこし明たる間より、火影吹あふちて黑棚のきらめきたるもゆかしく覺ゆ。女出來りて御訪らひのよし申つるに、入らせ給へ、物隔てかたりまゐらせんと端の方へ膝行出給ふ。彼所に入らせ給へとて、前栽をめぐりて奥の方へともなひ行。二間の泉殿を人の入ばかり明て、低き屏風を立、古き衾の端出て、主はこゝにありと見えたり。正太郎かなたに向ひて、はかなくて病にさへそませ給ふよし、おのれもいとをしき妻を亡なひて侍れば、おなじ悲しみをも問か

はしまゐらせんとて、推て詣侍りぬといふ。あるじの女屏風すこし引わけて、めづらしくもあひ見奉るものかな、つらき報いの程しらせまゐらせんといふに、驚きて見れど、古郷に殘せし礒良なり。顔の色いと青ざめて、たゆき眼すさましく、我を指たる手の青くほそりたる恐しさに、あなやと呼んでたふれ死す。時うつりて生出、眼をほそくひらき見るに、家と見しはもとありし荒野の三昧堂にて、黒き佛のみぞ立せまします。里遠き犬の聲を力に、家に走りかへりて、彦六にしかじかのよしをかたりければ、なでふ狐に欺かれしなるべし、心の臆れたるときは、かならず迷はし神の襲ふものぞ　足下のごとく虚弱人のかく患に沈みしは、神佛に祈りて心を收めつべし、刀田の里にたふとき陰陽師のいます、身禊して厭府をも戴き給へと、いざなひて陰陽師の許にゆき、はじめより詳にかたりて此占をもとむ、陰陽師占べ考へていふ。災すでに窮りて易からず。さきに女の命をうばひ、怨み猶盡ず、足下の命も旦夕にせまる、此鬼世をさりぬるは七日前なれど、今日より四十二日が間戸を閉ておもき物齋すべし、我禁しめを守らば九死を出て全からんか、一時を過るともまぬかるべからずと、かたくをしへて、筆をとり、正太郎が背より手足におよぶまで、篆籀のごとき文字を書、猶朱符あまた紙にしるして與へ、此呪を戸毎に貼て神佛を念ずべし、あやまちして身を亡ぶるなかれと敎ふるに、恐れみかつよろこびて家にかへり、朱符を門に貼、窓に貼て、おもき物齋にこもりける。其夜三更の比おそろしきこゑして、あなにくや、こゝにたふとき符文を設つるよとつぶやきて復び聲なし。おそろしさのあまりに長き夜をかこつ、程なく

夜明ぬるに生出て、急ぎ彦六が方の壁を敲きて夜の事をかたる。彦六もはじめて陰陽師が詞を奇なりとして、おのれも其夜は寢ずして三更の比を待くれける、松ふく風物を僵すがごとく、雨さへふりて常ならぬ夜のさまに、壁を隔て聲をかけあひ、既に四更にいたる、下屋の窓の紙にさと赤き光さして、あな惡や、こゝにも貼つるよといふ聲、深き夜にはいとゞ凄しく、髮も生毛もことごとく聳立て、しばらくは死入たり。明れば夜のさまをかたり、暮れば明るを慕ひて、此月日頃千歲を過るよりも久し。かの鬼も夜ごとに家を繞り、或は屋の棟に叫びて、忿れる聲夜ましにすさまし。かくして四十二日といふ其夜にいたりぬ。今は一夜にみたしぬれば、殊に愼みて、やゝ五更の夫もしらじらと明わたりぬ。長き夢のさめたる如く、やがて彦六をよぶに、壁によりていかにと答ふ。おもき物いみも既に滿ぬ。絶て兄長の面を見ず、なつかしさに、かつ此月頃の憂怕しさを心のかぎりいひ和さまん、眠さまし給へ、我も外の方に出んといふ。彦六用意なき男なれど。今は何かあらん、いざこなたへわたり給へと、戸を明る事半ならず。となりの軒にあなやと叫ぶ聲耳をつらぬきて、思はず尻居に座す。こは正太郎が身のうへにこそと、斧引提て大路に出れど、明たるといひし夜はいまだくらく、月は中天ながら影朧々として、風冷やかに、さて正太郎か戸は明はなして其人は見えず。内にや逃入りつらんと走り入て見れども、いづくに竄るべき住居にもあらねど、大路にや倒れけんともとむれども、其わたりには物もなし、いかになりつるやとあるひは異しみ、或は恐る恐る、ともし火を挑けてこゝかしこを見廻るに、明たる戸腋の壁

に腥〳〵しき血灑ぎ流て地につたふ、されど屍も骨も見えず、月あかりに見れど、軒の端にものあり。ともし火を捧げて照し見るに。男の髪の髻ばかりかゝりて、外には露ばかりのものもなし、淺ましくもおそろしさは筆につくすべうもあらずなん。夜も明てちかき野山を探しもとむれども、つひに其路さへなくてやみぬ。此事井澤か家へもいひれくりぬれど、涙ながらに香央にも告しらせぬ。されば陰陽師が占のいちじるき、御釜の凶祥もはたたがはざりけるぞ、いともたふとかりけるとかたり傳へける。

東塢鶴聲（つゞき）

朧　昔　生

たゝまくをしき　タヽマクヲシキ、は、立んも惜き也。マクの約、やがてムなれど、ムといふ時は、モとか、ハとか下に加る詞なくては惜さに次で難し。こは延約によりて語勢かはる故也。語勢は即調也。調は義理を待ずして誠實の聲あらはるゝ者也。より〳〵調のまに〳〵同じ詞の異義を生ずる多し。調は義理を含て義理の上に位する者なれど也。歌は調べにある事を知りて、さて後義理を伺ふべし。義理明ねて後、調べあるものとあやまつ事久し。故に古言こと〴〵く活地を失ふ贅物となれり。世人これをみて、歌は狂言綺語也といふもうべ言也けり。既に貫之ぬしも、詞を綺靡にかるといへども、義を敎戒の中にとるといへり。竊に考ふるに、何ぞ事々物々の上に付て誠實を吐んに、綺靡をかるの暇あらんや。されど、又敎戒の義に意なし、只此一つの誠を述るのみ。もし明人探て敎戒とするは知らず、己あづからざるなり。

昔生云。桂園翁の所謂シラベは、尋常の歌よみがいふ句調の優美をのみいはれしに非ず。即翁の發明せられし性情の匂ひを、姑く然か名付られしものなり。故にシラベあれば歌、なくば歌に非ずともいへり。抑歌は、諷はん爲に作るものに非ず。おのづから、うたはるゝものなり。歌は教義を主としてよむものに非ず。おのづから教ともなる者也。又、歌は美術にも非ず。技藝にも非ず。畢竟嗟嘆の聲也。此性情の根元を推さずして、歌を論ずるは、蓋枝葉の說なり。先哲の語に、歌はよむことの難きに非ず。知ることの難きなり。と、いへるも、此謂ならん。されど、こは專ら短歌に就ての論なり。長歌も、素より嗟嘆の聲の外ならねど、句法ある一種の美文と觀て可ならん。萬葉は長歌流行の時代なり。故に巧に作る人多し。古今以下は、長歌衰微の時代也。故に其作拙なし。猶愚說あれど、今いはず。

言語は時に隨ふ。詞は、義理をそこなはぬ限は、時務に從ふべき者也。萬葉などの古書の詞は、いと正しき古言也と思へるは誤也。萬葉の詞も、猶萬葉より昔の語も音便に頽れたるが多きなり。天地の開けしより、言語の道あるべきなれど、いつを本と定め、いつを末といはん。千載の後にかへり見ば、今の詞、本にして、後の詞、末なる事論なし。此理りを識得て後、古言をば初て得らるべき也。因て昔よりも、今の詞、却て太古に叶ふも少からず。是限ありて、其本にかへるは、環の循還して本末を知らざるが如し。されど、當れる時を時として、初、中、後、のけぢめなきには非ず。古學と

いふに縛せられて、中々調を失ひ、義を害ふ人の爲にいふのみ。古言を捨て、時にのみ隨へといふには非ず。只心を用ふべし。

昔生云。桂園翁の言に、古の平言は、今の雅言也。今の平言は、後の雅言也。と、いはれしも此謂也。

忝　カタジケナシ、は、無二難一氣一也。忝天恩など、恐れもなきやうに思ふなり。カケマクモカシコキなどの裏也。貴人の尊旅などへ來るは難き事なり、さるを難き氣もなく入來たるをいふなり。

統　マトヒの言は、打統ひするにて、一統一群の事なるを體言にマトヒスルともいへり。古今に、いざけふは、春の山べにまじりなん云々も。顯注或は奥義抄に、は、三ノ句まどひなんとあるぞ正しき密勘に、迷ひなんをハマシリナンに點をわひて可レ用レ之由侍し也とあり。こは、マトヒナンは、統して酒など酌んと云なるを、迷ふ事と見られしより、マシリに點しかへられたる也。思ふどちまとひせる夜は唐錦といへるも同じ。是を此頃圓居の意と思ひあやまりしより、マトヒナンと活きたる用言なぞ、圓居の詞しか扱ふべきにあらねど、或ひなんと意得て、さて或ひなんと有ては意通らねど、直したるもの也。中務集に、思ふどちまとひてみれど梅の花心にくしや深くみゆらむ。といふにも合せて見るべし。

昔生云。マドヒの語源二説あれども、桂園翁の說に從ふべきか。古言梯は、古本神樂歌を證として、マトヰ即圓居の意とせり。橘守部翁の神樂入綾には、圓居は非なり。纒居なりと云れたり。昔生考ふるに、神樂譜の居は、所謂音便の

まゝを寫したるものに非ざるか。されど、マドヒは集を、ツトヒ　ツドフ。住を、スマヒ　スマフなどいふと同格の詞ならんか。

酒瓶並に酒鍾の詩

金津常十郎

こは、祖父宮井民同のものせし、主客の問答せし、三江茶話と（酒瓶詩）ふ者より抜出でしなり。

客曰（中略）先年予が友人より、酒器二品に詩を以て其形を作りたる圖を見せしが、殊の外たくみにて、讀方を考へ得ざりしなり。其の二つの圖は左の如し。

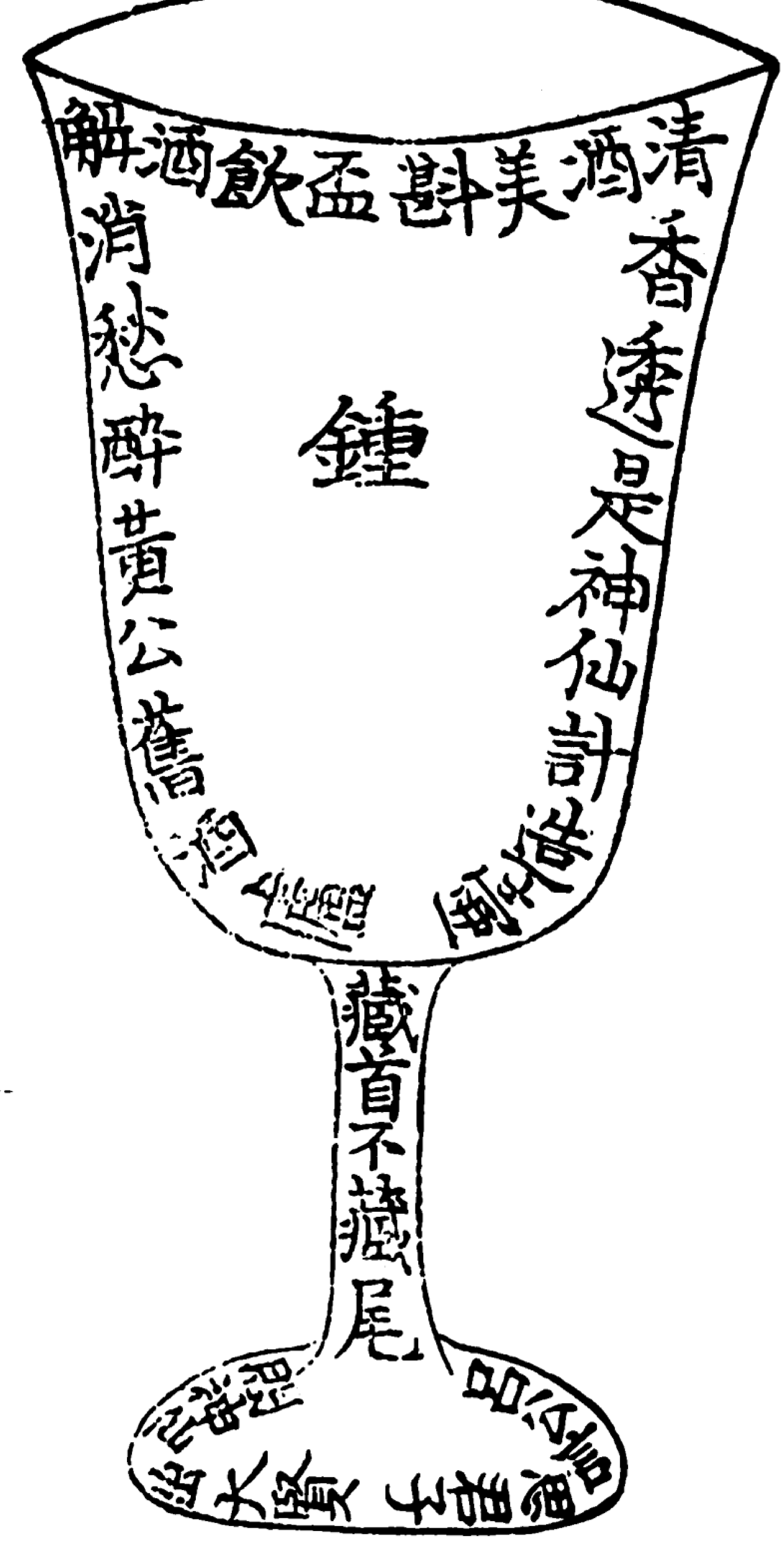


右の通りなれども、字數たらずして全く詩になりかたし。是らの讀方いかゞあらん。

主曰、右二器の詩は、學海群玉といふ書に出でたる品と同樣のものにて、則、酒瓶の手と口に記せる句は、全詩の讀方と其勢をいひたる文なり。その句に曰く、

藏レ頭藏レ脚不レ藏レ身　進退交レ君子細尋
任レ君用二盡千般計一　不レ是才人讀不レ成

酒鍾詩



右起句のごとく、頭字と、脚字とは、蓋と臺との内の字にかくして、酒瓶の躰に記せる字は、皆一句一句の身ばかりの字なり。まづ酒瓶の詩を左にあらはして、藏れたる字は見安からんため、肉太文字を用ひてしるす。

酒映二金盃一滿甕香
日有二王孫公子一嘗
旨甘入レ口連心美
大家沈醉各歸レ房
方知好酒留二賓客一
口念劉伶詩百章

十里荷花紅粉且　一輪明月照二擾漿一

右の通りなり。又、酒鍾の詩は、柄に記せる句に、

藏レ首不レ藏レ尾

とあるは、讀方の心得にて、頭字をかくして作りし

ものなり。是も、亦、前段と同じく、かくれたる字は、肉太を以て左に記す。

堅㆓掛美酒㆒清香透　乃是神仙計造㆑壺
金盃飲㆑酒解㆓消愁㆒　心酔黄公舊酒廬

右のごとくなり。又、臺に記せる詩は左の如し。

口口呂公言　門口問㆓神仙㆒
田心思㆓君子㆒　山山出㆓太賢㆒

右二器の詩の讀方此通りにて、おもしろくたくみたるものなり。是らの類いろいろありて、初めて見る時は考へにくきものなれども、大体其たくみあんぞいは、同じやうなる趣のものなり。

八かく

こも隨のうちより抜出づ。いさゝか敎のかたはしにもとて。

敎へしらねど恥をかく
理にわたりてはわたまかく
欲が過れどことをかく
いかり過れど用をかく
わがまゝなれど友をかく
惡をしらねど善をかく
苦しみしらねど樂をかく
信がなけれど喜びをかく

右少しつたなく侍れとも、ことわり面白し。故にしるす。

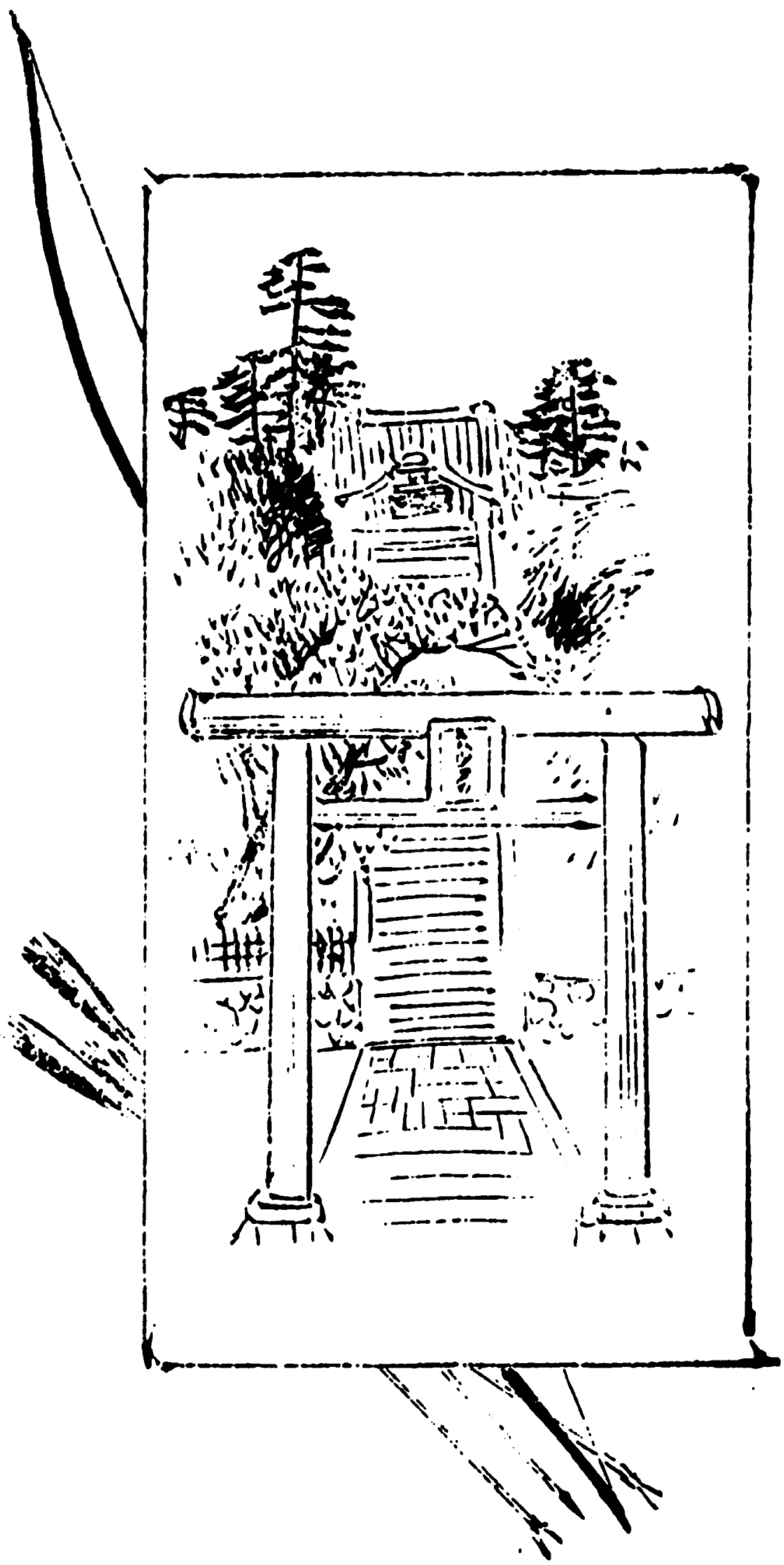
東京二十四景（二十一）

蓬屋女史

市が谷八幡宮

皇城の北、市が谷見附の外、揚場より蜿蜒として

つらなり來れる丘陵、ひいて遙に谷町に及ぶ。この間に神樂坂あり、逢坂あり。淨瑠璃坂あり、左内坂あり、合羽坂あり。人家、魚鱗とならぶ間に、樹林點綴して、自ら風趣あり。左内坂より少し左にわたりて、石磴數十級、樹間にあらはれ、その上にかう〴〵しき祉あるは、これやがて、市が谷八幡宮なり。正面の急なる坂を男坂と云ひ、左のなだらかなる坂を女坂といふ。女坂と男坂との間の、坂の半に稻荷のやしろあり。坂の上は、地ひろし。かたそぎ高く聳へて、神鈴つねにひゞきをなす。梅あり、櫻あり、太田道灌手植の松は、いくたび植ゑかへられしものならむ。西は士官學校にとなれり。もと尾張侯の屋敷なりき。馬場ありて、馬の稽古するさま、眼下に見おろさる。南をのぞめば、景色いとよし。ひとすぢの堀、もと



的江戸城の外廓のなごりを存して、溶々たる春水に、雁、かもなど樂しげに水に浮べり。芝生靑き一帶の土手の、上には老松たちつゞきて、千年の綠色を送り、下には若櫻たちつゞきて、あだなる色にゝほふ。その櫻と松との間に、飯田町より新宿へかよふ一線の鐵道ありて、むかでの如き汽車の烟はきて走るさま、都にはめづらしきながめなり。

この地、むかしは芝居ありて、いたうにぎはひしこと、江戸名所圖解に見えたれど、今はさるものなくて、いと靜かなり。祠前、崖にのぞみて茶店あり。雨ふる夕など、こゝに來りて、しづかにのむ一椀の苦茗に、そゞろに塵の世もわすられてなむ。

朝露（其十二）

柳子
櫻子

此處は、下野の國、鹽原の里。鹿の泪といふ紅葉も、はやいろづきそめて、何處の山々錦ならぬはなく、紅葉見にとて來る人の多ければ、常にまさりていと賑はし。馬のあし洗ふ淸きはゝき川に沿ひて溯れば、此處も紅葉はひとしほなり。一本の古柳をたてにして野部みわたせば、草は半は枯れ果てたれど、秋におくれし龍膽のゆかりの色ふかし、そをかたへのさゝやかなる花籠にたをり入れつゝ、柳のもとに一心に、花に心を注ぐ年若き赤十字社の看護婦一人、年はやう〳〵廿一二、おもやつれたれどいと麗しく、着たる衣と顏の色といづれかしろきをあらそふ如し。こは、軍より歸りし、脚氣患者の

療養に、此の鹽原までしたがひきたれるものなり。

ほんとうにいゝ景色だこと、林さんや、中川さんも、來て御覧になれないのに。まあ此の川のいつもくく清いこと。母さまや兄さまと、すまきの湯瀧あそびに行くときは、いつも渡つたのは、あのあしこに見ゆる橋だつたらう。それでもよく崩れないこと。むかしいつしよに渡た人は、皆なくなつてしまつて、川や橋はちやんとしてある、しかも少しも變らないで。アー此の世の中は儘にならないもの、此の花もこのとほり、今はこんなにときめいてゐるけれども、冬近くなつて、一度無常の風が吹けど、皆散てしまう。世の中はみんなこんなもの、ほんとにうき世はいやだ。

手に持ちし龍膽は、此の時こたへかはにうごきて、すがりし朝露はらくくとちりぬ。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

其十三

此の看護婦、患者に向ひては殊にしとやかに優しく、暴き獣をもひしぐてふ軍人も、此の看護婦の公平なるみとりには涙を流したりとかや。されど、よく赤十字社の本分を完うすとて、さるやんごとなき御方より、御ほめ言葉をさへ給ひしとかきゝぬ。かれにつれて、朋友には敬服せられ、且信じられにき。此の看護婦の、常に身を離さゞるものありて、なかま中に此のはなしかまびすしけれど、或日、親友のたれかれうちつどひて、人なき折、熱心に聞きたれども、只にこくくとうち笑ふのみ、更に言ひも出でず。親友の林花子といふ看護婦、おのがはらからの如く親しむ人の事とて、何となく心安くならで、ある日、

彼が入浴のをり、そのひめれけるものを取り出して見たるに、美しき錦の嚢の中に、美髯をたくはへたる偉丈夫の寫眞一枚、外に、松井みち子様としるしたる文一通。いかりのかたなる金釦一個あり。さても如何なる人の名こりなるらん。いと床しく、又あはれなり。

（をはり）

水産王（つゞき）

石樽青苔

春は花鳥の艶なるにも心を動かさず、秋は月紅葉の優なるにも未だ魂をうつさず、なりはひのことの他は、よそ目にだに見ることなく、夜を日につぎてつとめいそしみ、事ごとに整ひ物ごとにをさまりて、漸くわが身あるを知るに至りし次の年の秋のころなりき、雞林に風ふきたちてわが國の空にも及び、こゝにもかしこにもたゞこの事をのみいひのゝしる、程もなく清國との戰は陸には成歡にひらかれて、勝のすゝみに平壤に攻入らんとし、海には豐島の沖にはじまりて、一個の彈丸は千余人の敵を底の藻屑となしぬ、これよりは旅順口ぞ威海衛ぞ、何れにしても天より祐けを賜へるわが國は人の力にてもいみじきに、また此上神わざのありてなれど、都にたしよせむもまだゝく間と、深山の奥の山賤の子に至るまでいさみたつ中にも、滿穂男は豫備召集の令に應じて、「とてもかくても國のためには牛とも馬ともなれ、歸らむはさも定まらじ、わがたちし後はさぞな何かにつけて便なき事も多からむ、ましてそなたは臨月にも近しときけど、宜く／＼身をいたはりて心をひろくもちてあれよ、常ならぬが世の人の常、われも起たむとすれど仆すものあり、成らむとすれど

妨ぐるものありて、今にえ起たずいまだ成らず、遺恨骨髄に徹れども今はた何をかせむ、いはゞ不忠に似たり、語らむ未練に近し、さりとて輸卒にていかばかりの功をなし、國のため忠をたつべきぞ、たつとたたぬとは爭ふべからぬ處、おくれて譏をうけむより、進みて營所に入らむ、たゞ頼みがたきは人ぞかし、このこと忘るゝな、」といふに、何事もいはで袖をかみつゝたゞさし俯向ゐたりし妻は、泣かじとすれど涕はことわり去らず亂れおちて、物もえいはず夫の袖をとり「いかにくるしきことありとてその時のこと、日頃の氣性を出したまひて必ず心みじかくもち給ふな、申さむほどのことならねど寒暑によく御心を用ゐたまへ、しらぬ山河をのぼりわたり、幾千百里數も限もいひえぬ國にいでたゝして、ことごとに畏れむかまへて御身を大切に、必ずとく歸り給ひてよ、今一月もたゝばよしやさとらぬほどなりとも、この子にも送らせ奉るべきに、」とやう〳〵暮りゆく言の葉、「今はたゝむ、歸らむ折はその子もともに立待ちて、うれしき笑顔見ることを得む、」とふるひたてど、「たゞその時を待奉るぞや、」と船にのるべき處までおくりゆきて、見えずなるまで見送りしが、忽ちこゝろたゆみてわとばかりに泣出しけれど、れ正は理の上の理ととかくにいひなぐさめぬ。聲こそきこえね、涙こそ見えね、船の中の思ひいかで劣ることあるべき、思ふに腹もたゝるゝならむ。

仙臺には、すぐ立ゆくにもあらず、されどかまへて逢ひになどは來な、原ぬしのもとにわれむ家に在るも仝じ事、もしわれこゝにありときゝてくる事もあらむ、それこそそなたの身体にいみじきあやまち出來なむ、われを大事と思はゞ、上が上にも身をつゝしみ

てなどいひくるに、今一目と思へど思ふまゝならぬ身のせむかたなく、文のたよりを面のあたりあひ見るやうに思ひて過ぎぬ。愈々出兵とき丶又今更に物悲しく、わが身はなどかくめ丶しくのみなりにけむ、戰にものしたまふとも、苦しき代りには危きこともなしときく、さるを涙のみさきにたつはいかなることにか　われたゞならぬ身なれど、女子の一大事とある其折になり、あしきこともありて又會ふまじきかも志れぬ志らせにはあらぬか、もしは又夫の身の上にか丶わりてはならぬことなれど、いづれにもせよさることのありては何とせんなど思煩ふ内、さる夜のことれ正は神棚に御光晝の如くにあげ、やさしき柏手さへいとうれしげにきこゆるは、主人の無事を祈るかといと殊勝に思へるほどこそあれ、めづらしく幼き泣聲、さてはこれなりけりと、製造場の誰彼が噂にのぼりぬ。

百日も過ぎいさ子はもとの如くになり、夫の顔さながらなる男の兒にはまだ七夜といふ頃、伯父に乞ひて清といふ名をたはせていつくしみ育てける。また廣島にとゞまれる夫には絶えず文して子の上わが身のことをいひやるにつけて、まゝにならぬわれはあひつらずとも、此兒に一目など千々の思ひに煩ふなるべし。

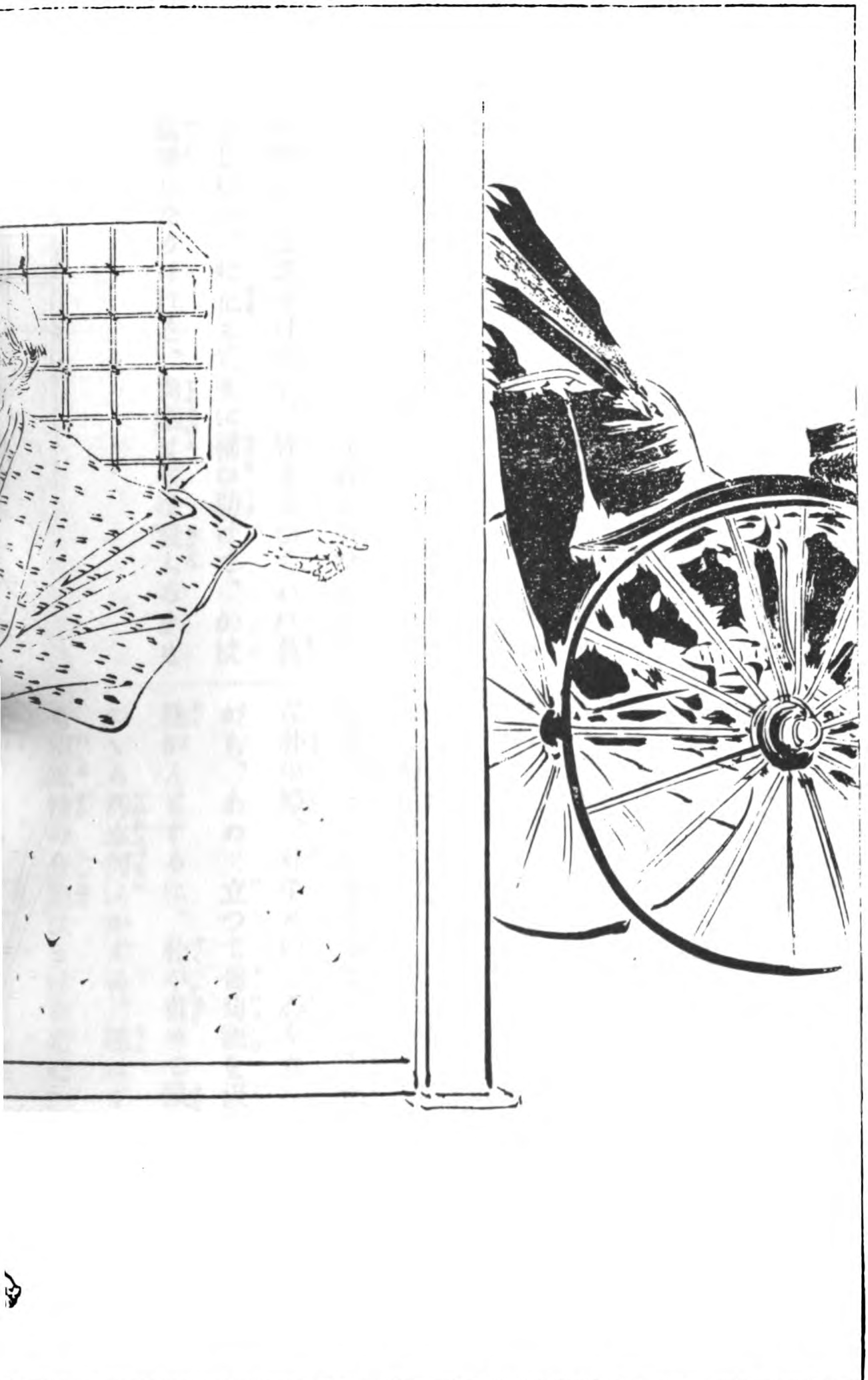
遠く千里にあり、ことに戰場にある夫を慕ふは、内にのこれる妻の情なり、はしき子を養ひはぐゝみて、あはれ人の上にたゝせむものと、敎へ導くは母の愛なり、この情にれはれこの愛にひかされ、日も夜も足らぬ内にもいさ子は夫の留守をうかゞひて、十年の舊恩を讎にむくいし八助のことを思ひいで、又いかなることもやと思ひまはせどたゞにはえあら

ず、さることはなきにもせよ、わが華主の清國は今やわがうつ敵となりて、わが商の道絶ゑ、其上かたらふべき夫はいまさず、こゝにてあしくふるまはゞ、遂にわが夫の心をこめてなし給ひし商も空しくなり、財産はた失ひ盡さむ、夫のゐまさぬほどにさる境に陥りては、われはた何とか申すべき、いでわれは夫にかはりてわが商の道にたどり入らむと、をゝしくも思立ちて、幾百人の工女を見まはりつゝ、魚のつくりかたのよしあしなどを見、あしとてさまではとがめず、よくつとむるものには賞をあたふることのみ夫の時にもまさりけれど、皆きほひてわれ負けじといそしむに、お正もともに補ひ助けて、かはる〳〵に監督したりけれど、商業はなほ衰ふるまもなし。

朴平（十九）

白魚女史

顔色さへ變へて案じまどふ小千代の袖の涙、さぞかりいつはりの色とも見ゑざるに、流石朴平もやゝ心とくると共に、主人の行衛いよ〳〵氣遣はしく、たとへ魔界にもあれ、濁江にもせよ、此處にれはさぞせめては心はれちゐんものを、何處へは行かせ給へる、おぼつかなやとばかりに眼を閉ぢ、思案にくれて、面色はさながら土の如く、灰の如く、血脈もたゑはつるばかりなるに、小千代思はずおどろき、あな朴平殿、朴平どの、心をたしかにしてよと呼びながら、あわてゝ立つて葡萄酒を汲み來り、朴平が口に注がんとするに、朴平甫めて眼を開き、けがらはしかゝる汚水何にかする。迷はするな。朴平は死しても猫風情の介抱はうけずとばかりに、こつぶとりて





疊にうちつくるに、あはれや、また一入みなぎりかへる小千代の涙と共に座敷は狼藉、うしほのわくが如くなり。

朴平もこらへぬ涙を兩の掌に拂ひ、つと立ち上り、しづ〳〵と店に出で﹅待ちつる車にうちのるまも、そゞろに思案つかず、今一走り走らせてなき奥樣の御墓にと參見んか、さりとも此のま﹅に歸らんか、いづれにかせんとばかりに、決しかねたる心を、やう〳〵定めて、家路へ引きかへさすれど、なほさま〴〵に亂る﹅思ひ、もしは、あまりに人をいとひ玉ひて、世を捨てさせ玉ふ御心になり玉ひしにはあらずや、まさかに〳〵さるおろかなる君にはましますまじ、さりとも何處の里、如何なる宿を求め居らせ玉ふぞ。か﹅る時旅野樣のましまさで、たん賴みも申さんものを、京都は何處にかましまし玉ふ、せめて御處尋ねもれかんものをなど思ひ、また其方に車を走らせ、立ちよる門に、ふと主人の聲とおぼしき聲音の聞ゆるやう覺ゆるも心の迷ひにやなど思ひつ﹅、案内請へど、例のおつる立ち出で﹅、あな朴平殿か、何をさやうに青き顏して。文雄樣は此處へ居られてなれど、まづ〳〵氣遣ひ玉ふなとの先きよりの言葉に、朴平思ひがけずうれしさに、中〳〵涙のみ先き立ちて、何もえ云えぬを、何を朴平どの、さやうになき玉ふ。さては外にかなしき事にてもありしにや、文雄樣より外には、また妻も子もあらぬ朴平どのと聞くものを、誰れをかいとをしき人にてもなくせしにやなどと、下女のうち笑ふに、げに老いてははしたなく涙のみこぼれて、我ながらはづかしき事にこそ。毎々主人の上りて色々御世話をかけ奉りぬ。本日は用事も候へど、朴平御迎に上り

たり、すぐ御歸りあらするやう、主人へ申聞えて玉へと、朴平あらたまりて云ふを、彼方はなほ笑うてほんに朴平どのは、孫子にてものし玉ふやうに、をかしや、文雄樣に何の用事などおはさん、何はともあれ、まづ上られよ。しぶ茶にても參らせんなど彼方は萬づにをかしうたはぶれ云へど、朴平は何處までもうちとけぬれども、いや／＼、今日は誠に用事あり、早う云ひ傳へ玉へとて顔をもくづさぬを下女はなほをかしげにうち笑ひて、やがて奥に入りまた出で來りて、文雄樣は御宅へかへりては、腦にさはる故、當分此の家におはすとの仰せなれど、朴平どの案じ玉ふには及ばず、何もおかまひは申さねど、大切には致しかしづかんに、心おきなくあづけられよと聞くより朴平はえ堪えず、主人の居る處へつと通り、きつと形をあらため、文雄の前にかしこまりて、若殿、何とは仰せ玉ふ、けしからぬ。御身は親御の家を去り玉ひて、如何なる叶はぬ事ありて人の家の食客などの玉ふ。誰れにたのまれ玉ひて、人の家の留守番とはなり玉ふ。丈夫とも聞えぬ業、さりとては聞えぬ君にはならせ玉ひしよ、いざすぐに歸らせ玉へ、と疊たゝきてなきくどくに、親の家かへぬとも限らず、きたなき庵にすむ甲斐なけれど、此文雄はすみすてしなり、蛇なり、毒蟲なり、勝手にすみあらせよ、頭なやまし、わかぬ事を傍にてわめきてくれるなとて、手枕してうち臥さんとする文雄を、なほおし起し／＼、今日のみはどのやうの事仰せらるゝとも、供し奉らずにやはおくべき。たとへ、如何なる御友の中なればとて、お留守の家にことわりなくとまいらせ玉ふ事やはおはする、和君にも似玉はぬ心なき事仰せ玉ふ。朴平は僕なれど、君

をさ必ず守れよとの、大殿よりの御言葉玉はりたるもの、勿体なけれど、言の葉はかりは親御にて候と固くつめよるに、だまれ、うるさし、親も子もいらぬ、親は死せしなり。文雄も男一匹、其方風情の天保人間の言葉に従ふ男にはあらじとて、中〳〵に動く景氣はなかりけり。



文林

漁火遠去　西三條實義

一列にみねしかゝりもいつとなく
沖のなみまにかくれけるかな

月前歸厂　近衛忠煕

ればろ夜の月の下ゆくかりがねは
聲むかりこそさやけかりけれ

春雨晴　東久世通禧

春さめははれにしものを花さかり
こゝろゆるして朝いせしかな

野春風　高崎正風

春の野はかすみこめたり何處より
うめが香れくる風はふくらん

雨後花　佐々木高行

のこりなく雨雲はれてあさ日さす

高ねのさくらいろぞにほへる

春里　津輕承昭

山ぶきのちりて流るゝかはみづに
わかゆつるなり井手のさと人

山路雉　本多忠貫

山みちをあさこえくれは松むらの
かすみのおくにきゝす鳴なり

汽車にて宇治川を渡る時　宮地嚴夫

ものゝふのさき爭そひし宇治川も
車よりみてゆく世なりけり

春夜雨　小出粲

ゐねふりの覺れぞまたぬ聞えけり
止ぬとおもひし夜半のはる雨

河上春月　加部嚴夫

わかゆつるひと影絶てたまがはの

川せのどかにつきぞかすめる

花を見てよめる　荻原巖雄

咲はなにむかふこゝろを心にて
よをしすごさむ樂しからまし

春月幽　遠山英一

山のはの花とほしろくみゆるかな
いてたる月はおぼろなれとも

をりにふれて　鎌田正夫

さゝれしく都おほぢにちるはなは
かはせのなみのこゝち社すれ

花林朧月　岡山高蔭

そこともなく人聲すなりおもしろき
おぼろ月夜のはなのしたかげ

大坂にやどりけるころ　大畑弘國

まかねちの烟もたえずいにしへに

たちまさり行く御代をこそしれ

英照皇太后崩御ありける頃雪の降けるに

三輪義方

かきくらし亂るゝ雪にくさも木も
さくはうれひのはなにそありける

遠村畑　草野隆道

とは山のふもとの里の夕けふり
雲よりうへにたちのほりつゝ

内田隆昌の妻　佐々豊水

天かける鳥よりたかきなりかふら
大樹のこすゑなびかしにけり

正行　菊地眞澄

かけ高きはゝそ一木のしをりにて
ふみ行く臣のみちもたがはす

待花　伊東祐賢

咲き出てぬはなの心をかへりみよ
散りなん事のうきにたへねは

馬上見花　安齋篤敬

花かけを行けともあかす駒とめて
いさみつかはん小金井のさと

花開似美人　木庭芳香

朝露にひもとくはなのゑまひこそ
をとめのたてる姿なりけり

のとかなる日濱へにいつ　近衛貞子

海人の子に我もましりて打かすむ
はまへに今日は貝やひろはん

蛙　鍋島榮子

苗代のみつせきいれしゆふへより
ところ得かほにかはつ鳴なり

故郷山吹　蜂須賀随子

故郷にすみけんひとをたつぬれは
こたへぬいろに匂ふやまふき

河蛙　前田朗子

さくら花ちりてなかるゝ山かはに
聲かしましくなくかはつかな

橋邊柳　柳原愛子

あゆつるゝ橋のたもとに立よれは
糸はやなきにまつかゝりけり

春月　小池道子

あめちかく成やしぬらんかはつ鳴
小川のつきのかすみはてたる

野徑蝶　岩崎寧子

夕まくれつくし摘子も歸りゆく
みちにさきたちとふ小蝶かな

山家梅　日野西廣子

梅のはなさきそめしより山さとも
みやこの人にとはれぬるかな

春朝　三宅龍子

今しはし朝いしてましすかの根の
はるの日影はなかゝるものを

遠村柳　鶴久子

山はたの麥生の末にうちかすむ
やなきや里のしるへなるらん

朝花　税所敦子

ゆふはゑを何かいひけん朝つゆに
ぬれたる花のうるはしきかな

池魚　西西子

大庭のみいけにすめるいろくつは
つりの糸をもしらてすくらん

夕雲雀　遠山いね子

わかねさす日は傾きしはるの野に
たちんともせす鳴くひはり哉

見花　内田遊歌子

はなを見るけふの心をこゝろにて
としをすこさは嬉しからまし

曉鶯　柴田靜榮子

月かけは西にめくりてあけそむる
梅のはやしにうくひすのなく

落花　師岡須賀子

春をたゝのとけき時と思ひしは
花ちらぬ間のこゝろなりけり

暮春　仝

春もはや殘り少くなりにけり
のとけき程はゆめのまにして

漁村露　安東菊子

あ引するあまの子ともの聲はかり
かすみをもるゝはるの海原

春雨　清水靜子

佐保姫の糸くりかへすこゝろして
ゆふべ淋しくはるさめのふる

名所鶯　小出粲

おのれわかゝりし折、よしのはつせの花みんとて、おしてるなにはを立て、河内路をたどり、竹内峠をこえしとき、いとものさひしき山なかに、おもひかけず、はなやかに鳴きたるうぐひすの、めづらしう身にしみてこそおぼえしが、行々やまかつめく翁にとへど、こゝをなん鶯のやどとはいふなるとこたふるに、さてこそはと、いとゞゆかしう、立かへりてもいまひとこゑ、きかまほしかりしことの、今にわすれ

かたらなん。かぞふれば、三十年ばかりの昔になりにたるを、いま名所鶯といふ題によりて、ふとれもひいでらるゝまゝに、いさゝかせめふたきにとてこそ。



雜報

●行幸啓　天皇　皇后兩陛下は、さきに、皇太后陛下御葬送のため、京都へ行幸啓あらせらるべき筈なりしも、折柄兩陛下とも、御風氣にわたらせられしを以て、一應御見合となりし所、こたび御百日祭に當り、御陵御親拜の爲、去る十七日午前七時二十分御發輦、名古屋離宮へ御一泊あらせられ、翌十八日午後二時三十分、御機嫌麗しく京都へ御著輦遊ばされ、たゞちに御所に入らせ給へり。

●英照皇太后御百日祭　御陵前御百日祭は、御豫定の如く、去る廿日午前九時四十分より、泉山御陵に於て行はせらる　御代拜九條公　皇后陛下御代拜高倉典侍　皇太子殿下御代拜醍醐侯にて　參拜皇族は小松、山階兩宮殿下を始め　供奉の三大臣其他供奉員　女官　華族百餘名參拜有て、午後一時三十分全く式を終れり。尚、當日は、青山御靈前にても、御定めの如く、御祭を擧行せられたり。

●御親祭　兩陛下は、京都御着輦の翌十九日、午前九時三十分、一等公式鹵簿にて　離宮を御出門、泉山東北御陵へならせらる。泉山坂下門よりは、御徒歩にて御陵前に赴かれ、御拜玉串を奉り給ひて、同十一時二十五分還御在らせられたり。

●山陵御代拜　本年一月三十日は、孝明天皇御三十年祭に御相當の所、英照皇太后崩御に付、御親祭仕せられざることとなりしが、今回の行幸を幸ひ去る二十四日、孝明天皇御陵、並に、御近陵、後桃園、光格、仁孝、三帝の陵へ、御代拜を差遣はされ、御祭式を擧けさせ給へり。

●大使を英國へ差遣はさる　英國皇帝ビクトリヤ女皇は、今年即位六十年に當るを以て、其の祝ひを催す事となり。我が國よりは、有栖川宮威仁親王殿下を、参列の爲、差遣はさるゝ旨、去る二十二日御沙汰あらせられたりと承る。

●大御惠み　天皇、皇后兩陛下には、本月二日、新潟縣刈羽郡柏崎町火災の趣き憫然におぼしめされ、御救恤として、金三百圓を下賜わらせられたり。

●華族女學校　は、畏くも皇后陛下の令旨により、彜倫を本として、華族の女子を教育し、淑德の良妻賢母を養成せらるゝ目的なることは申すまでなきことなるが、生徒を獨り華族に限るは、公平普及なるべき教育の主旨に戻るの嫌あれとて、曾て士民の女子をも、數を限りて入學を許されしが、今度洩れ承れば、畏き令旨によりて、更に汎く一般の女子にも入學を許さるゝことゝなるべしといふ。かたじけなきおぼしめしにこそ。

●帝國大學の數學古書取調　遠藤理科大學助手は、本邦數理に關する古書取調の爲めに、さきに京

都に出張し、已にその取調を了へ、去し廿三日、大坂に赴き、各所の數學學校にて、取調をせしに、孰れも藏書に乏しき中に、獨り東區谷町一丁目なる大坂數學専門學校は、多くの珍本を藏し、就中左記の書は、今日に於て、得難き者なるを以て、同氏は是非購入せまほしきよしをいひしに、校主小森數藏氏は、帝國大學に備付くるものとならむ、寄附すべしとて、快く之を讓り渡したるよし、其書名は、

○類聚集成全六冊○貫通齊算草全一冊○圓周率五十倍精數考全一冊○算法圓理集解全一冊○古今算鑑起源全二冊○算法圓理表全一冊○護爲算法起源全二冊

●大石良雄遺愛の櫻　播磨國、赤穗城の古址に、大石良雄の故宅あり。その庭園の垂絲櫻は、即ち斯人の遺愛にして、手植の樹なりといひ傳へたり。樹下に『故淺野氏老大石君遺愛櫻樹碑』といふを建てたるが、文は赤穗の學者河原翠城翁の撰にして、書は津藩の書法師範井野勿齋翁が顏法の筆なり。碑の建てられしは、安政五年にして、同地の大姓三木政利等が篤志によりて成りしなり。翠城翁は、更に斯の櫻の爲に、題詠を四方の名流に徴して集めたるもの二百餘首、之を二卷となし、忠芬義芳誌、といひて世に公にせしが、このたび同地の有志、小川傳次郎、三木隆治、柴原政太郎の諸人發起となり、故内匠頭長矩の宗家たる廣島の淺野侯を始めとし、夫の四十七士が復讎後分け預けられし、細川、久松、毛利、水野の四家ならびに、義士に因ある、諸華族の贊助を請ひ、大石氏の祠を建て、その遺跡を永遠に保存せんとて、奔走しをれりといふ。

●臺灣の生徒　昨年末の調査によれば、臺灣各地の國語傳習所、及び臺北の國語學校、附屬校に在る

生徒の總數千二十六人にして、年齢最高四十一歳、最低八歳、（平均最高二十四歳、最低十歳）又其父兄の職業は、

勞腦者　三百十八人、　農　百六十七人、　工　三十八人、
勞力者　六十三人、　商　四百四十八人、

●卒業生をおくる詞　東京府高等女學校卒業式の模樣は、前號に掲けたるが、その節在校生總代として日下かね子の朗讀したるものは左の如し。

卒業し給ふ姉君達をおくり參らす

霞たちわたりて、化のかをりゆかしきこのごろは、なべて樂しきものなるを、わがまなびの屋の姉君達には、さだめの業ををへさせたまひて、一きは榮ゆる春にあふ今日なれど、御心の中、いかにかりか嬉しうれはすらん、されど、われ等が爲め、つねく〳〵道の志をりをし志たまひし姉君達にはなるも、またこの日なりとし思へど、嬉しきが中にも、うたゝたもとも露けくなん。まことや姉君達には、猶ふかく文の林にわけ入りたまふもあらむ、あるは樂しき家庭をつくり給ふもあらむ、兎まれ角まれ、わたし小經にまよはさらんには、御代の御惠にむくい、尊き師の君の御恩にこたふる萬が一にもならんかし。唯波かせあらき世の海に、遠近に相わかれんも、心へだてぬとも千鳥、間なくしはなく聲かはすこそねかはしけれ。千々のおもひもいまさらいひいでつべき言の葉をしらされど、あしの枯葉の一ふしのみ、ことわけするになん。

明治三十年四月四日

東京府高等女學校在校生總代

日下　かね

●世界各國人の壽命平均　歐米諸國を始めて、世界各國人種の平均壽命年限は、古來統計學者の說數多あることとなるが、今度古川醫學士の調査に係る、最近十年間を通算して、一年間の死亡者千人に對する平均壽命は左の如しといふ

國別	死亡數	壽命年
露西亞	三七、四	二六、七
獨逸	二二、八	四三、九

澳匈	二八、〇	三五、七
佛蘭西	二五、〇	四〇、〇
英吉利	二〇、〇	五〇、〇
瑞西	二五、〇	四〇、〇
白耳義	二五、〇	四〇、〇
和蘭	二八、〇	三五、七
西班牙	三〇、〇	三三、四
伊太利	三〇、〇	三三、四
瑞典	一九、五	五一、三
日本	二五、九	三八、八

●結婚統計　東京府下にて、去し明治二十八年中の結婚と離婚とを統計せしものなりといふをきくに、此如といふ。何か故に、かく離婚の多にか、深きゆゑあるべし。さて又年十三にも足らぬ女の、人に嫁きて、もし子あらんに、いかにして養育せんとするか。年六十路七十路をこゑなから結婚すといふも耳あたらしからさるにあらす。世の中はさまぐ＼なり。

婚姻

(結婚)　一萬四百七十五偶(内市内三千二百四十四偶)

(離婚)　二千四百七十二偶(内市内六百九十二偶)

(結婚年齢)　十三年未滿女一人●十三年女三人●十四年女十九人●十五年以上二十年以下男四百八人、女千八百九十七人●五十年以上男百三十六人、女五十八人●五十五年以上男六十一人、女十八人●六十年以上男六十人、女七人

(結婚年齢對照)　男十六年、女十二年のもの一偶●男二十年以上二十五年以下、女十三年のもの三偶●男五十五年以上六十年以下女十四年のもの一偶●男十五年、女十四年らの三偶●男十六年、女十四年のもの二偶●男十七年、女十四年のもの二偶●男三十五年以上四十年以下、女五十九年以上六十年以下のもの二偶●男七十年以上、女六十年以上のもの二偶

●東京市内の高齢者　其の筋にてとり調へたる東京十五區内の高齢者にして、今年九十四歳以上の男女を年別とすれば、左の如くなりと。

享保三年	男十人女十一	人計廿一	人(九十四才)
同　二　年	男九人女十四	人計廿三	人(九十五才)
同　一　年	男四人女六	人計十	人(九十六才)
寛政十二年	男二人女一	人計三	人(九十七才)
同　十一年	男二人女一	人計三	人(九十八才)
同　十　年	男一人女二	人計三	人(九十九才)
同　九　年	女　一	人計一	人(百　才)

同　九年　　女一人計一人（百　才）

●平家時代の琵琶を發見す　長門國壇の浦なる、土原村の舊家、金山與右衛門といふ人、此頃古き土藏を取りこぼちしに、天井板の間より、眞黒になりたる一個の筥現れ出でしかば、何物の入れあるにやと開き見しに、中より一面の古き琵琶出でたり、手に取り見るに少しの破損もなく、餘程見事の物にて、筥の隅には文字判明ならざる書附やうのものあり、早速皷師秦敎といふを呼びて鑑定を乞へは、正しく平家時代の物ならんと言ふに、金山氏は喜びて傳家の寶器となして珍重せんと云ひ居れりとぞ。人も知る如く、該地は、平氏滅亡の地なれば、或は都より落ちのびたる際、携へて西に走り、干戈の間に、優々閑日を樂みたる遺物なるやも知るべからず。

●紫野の不動石　京都紫野大德寺山内に不動石といふあり、古來有名の奇石にして、高さ一丈、巾四尺にて、開山大燈國師の、比叡山より移されしものなるが、應永四年正月二十七日、後小松天皇勅して此石を禁苑に召寄せ給ひしに、たま〳〵天皇御不例に在ませしより、石の祟りとなしたまひ、同年七月、此石を大德寺に返したまふ、慶長二年、黃梅院第一世、玉仲和尙、一小室を其側に新築し、之を不動軒と云ふ、夫より五十年を經て、承應二年、書院新築に際し、北庭にありしを、南庭に移し、今日に現存せり。此石の比叡山を出しは、五百七十餘年前にして、爾來再び兵火を經、一度禁苑に移されしも、終に故形を舊地に全くして、今に動かざるは、崇重すべき靈嵒なるのみならず、庭樹の間に屹立して、園藝の風致を保ち、雅韻掬すべきものあるを以て、黃梅院住職、大江大道師は、今度歌人に乞ひて、

詠歌百首を求め、之を屏風に裝貼し、一は靈石の緣由を傳へ、一は國風を諷誦すると倶に、園冶の雅韻を後世に存せんとて紫野不動石と云ふ題にて、廣く吟咏を募集すとぞ。

●百八十三歲　今はむかし、松平相模守の領內、因幡國氣多郡、松原村の名主鎌部儀右衛門といひしは德川二代將軍秀忠の時に生れ、文化元年正月、其齡百八十三歲なりし時、公儀、召出され、永代十五人扶持、白銀十五枚を賜はり、領主より百兩給しけるが、其時妻は百七十一歲、子は百三十九歲、嫁は百三十七歲、孫は百三歲、孫嫁は九十八歲曾孫は六十歲、其妻は五十歲、玄孫は三十七歲、其妻は三十歲にて九ッと六ッになる二人の玄々孫もあり、是等には二十人扶持白銀三十枚を與へしとぞ。いともめづらしかりしことよ。

●子福者　我が國にはあらず。遠き澳地利の國、維也納府にて、夫はリネン織を職とするもの丶妻某、今年四十歲なるが、三十二人の子を持てり。人並にはづれてあやしけれど、國民の繁るはまづ目出たしとやいはん。さて如何にして斯く數多の子を持てりやといふに、此の夫人、不思議にも、未だ一人の子を產みしことなく、初產に四人を產み、次に三人、三度目に四人、四度目に二人、五度目に三人、六度目に二人、七度目に三人、八度目に三人、九度目に二人、十度目に三人、十一度目に三人、都合十一回にして三十二人を產みたるなり。その內男子二十六人にして、女子六人、孰れも健全に育てられつ丶あり。尤も此母も、生れたるは四人子の一人にして、現に三十八人の兄弟を有せりといふ。されど、この後、尙幾人を儲くるやも知られず、誠に稀有のこと

どもなり。

●佛國の人口減少　佛蘭西にて、年々人口の減少するは、統計に於いて屢々見る處なるが、國人が、又之を憂ふることも切なりとみゑ、頃日赤子が巴里の街上に凍死しゐたるを見て、新聞紙の之を報するや、國民の之を惜むこと甚しく、諸工塲の女工は之が肌衣をつくり、男工は爲に石碑を作り、會葬するもの一萬數千人に達したりといふ。

又、全國にて、人体檢査の事を司り、且つ統計家として知られたる「ベルチロン」氏が人口の減少を防ぐ考案といふを聞くに、三人以上の子を有するものには一般の直税を免除し、三人以下、又は一人をも有せざるものに二割の附加税を課すべしといへり。如何に彼等が、人口減少をうれたく思ふやは、こを以て察するにあまりあるべし。

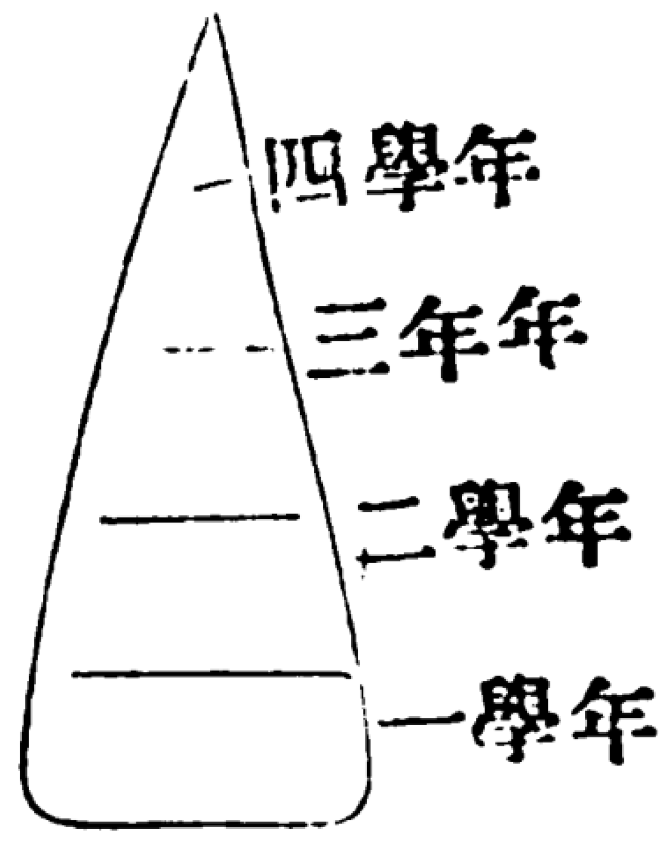
●おことわり　此の節、一般に洋紙拂底の爲め、かれこれ印刷に手間どり、本月五日のを廿日に、廿日のを本日發行することとはなりぬ。又紙も、常のにおとりて、品みぐるしけれど、今二三回免してよ。次號よりは期日もあやまらざることにつとむべけれど、兼題歌文も、必ず〆切までに送りこされたし。

●女子敎育の普及法　左に掲ぐる一篇は、山梨縣敎育雜誌に載せたるものなるが、頗る適切なる說にして敎の師、ならびに子たちの參考ともならんと思へるまゝにこゝに轉載す。

女子敎育の普及法私考

大河内友吉

諸君、私は只今女子教育の普及に就て卑見を述べ、諸君の清聽否な高論を仰がんと致します、夫れで女子の就學は、何れの學校を見ましても、實に遺憾千萬であります。現今、實際に教育を受けつゝあるものは、割合上僅少で加之のみならず、一學年より四學年に達する迄には、遞減して、殆んど圓錐狀の如き奇觀をなして居ります、即ち一學年の時には、其基底に於けるが如く、隨分就學者も澤山あります、續いて二學年位までは格別の減員もない樣ですが、偖三學年となりますれど、殆んど二分の一、若くは三分の二位に減じ四學年に達しますれど三分の一乃至四分の一位に減じて、尋常科位でさへも完全に其科程を修めて、義務的教育を果すものは、極めて寥々として、恰も雨夜の星の樣で、況んや高等小學科の教課を踐み了るものは、謂ふまでもなく、亦少數なる實況であります。斯の如き狀況を以て、年々を經過しましたならば、何時になつても女子に完全の義務を負はせ、女子をして高尙ならしめ、優美ならしめ、良妻たらしめ、賢母たらしむるを得さらしむるであり升うか、實に慨ひても餘りあることゝ思はれます。併し之れに就きましては、已に先輩教育家が、或は其不就學の多き原因を探究し或は其救濟の方法を講じ、其普及法に就ては細大漏さず論明して、今は殆んど遺憾がない樣で御座ります、去り乍ら、退て之を考へますに、切りに當局に於ても普及法の調査中であることを耳にしました、果して左樣ならど、遠からぬ中に吾々が拍手歡呼して迎ふるの時機に到達して、女子教育に就ては一層の光彩を添へ、一段の効能を奏するに至るべきは必然の事と信じます、そは信ずるものゝ、此時に際して之が討究をなし、參考の資に供するは、決して無用にあらざる必要なるべきことゝ思ひます、左れど、私も諸君の臂りへつひて、聊か研究したいので御座ります、夫れで私は、本題を分けて、先づ其不就學の多きと、中途遞減するの原因は、那邊に存するやを探究しましてから、之が普及法の大要を述べて本題の局を結ばんと致します。希くは暫時の間、寬假して其卑見を述べしめ、取



捨は諸君の明斷を仰ぎ、併せて垂敎の勞を吝まざらんことを願ひます。

さて、是から就學の僅少と遞減との原因に就き、私の突凹だ細く窄ひ眼孔で、廣ひ世間を觀察して、魯鈍なる腦髓に反映せしめて、判斷を與へたる狀態を捉へ來りますれど、大要左の諸點に外ならざることかと考へます。

第一　女子は男子に比すると、其身体の發育と隨て、世間的性情の發達とが迅速で、日常の用務を辨じさせるには極て便利である、例へど學齡頃になれど、子守は勿論家内の雜務の役には立ち、尙ほ、一、二年を經過すれど、下手な製糸工女の仲間入り位は出來るであるから、先づ〱口稼か、乃至は一文づゝでも、御金が取れる方が有り難い、地獄の沙汰も金次第てふ諺もあるから、先づ、一、二年間は嫌ひでも學校へ子守を托し、夫からぼつ〱自分の鼻の下の立つ樣にしたが上分別と云ふ所から遞減して、三年目位から、學校は御免を蒙むるなど云ふ一理由があります。

第二　尋常科位卒業では丸で屁の突張りにもならぬ、高等小學へまで學ばせるには、月謝は高し、衣服から敎科用具からして費用がかさむ、貧乏世間では誠に不如意勝で困つた者である、どうせ役にも立たず錢も無いから、女、子供は、いくら學問しても、夫れで御飯が食へる譯でない、尙、又、子持ちにでもなれど、折角に錢を掛けたも忘れて無益になる、恰も地獄の錢箱へ掛け金する樣で取り返しの付く次第でない、先づ何んでも手藝でも覺えさする方が肝心要めであると云ふ所から、學校へは遂ひ〱遠心的の動力に基きて、不就學と出掛ける實情であります。

第三　現今中等以下の婦女は、大抵明き盲で、其上に家政の實權を握つて、所謂山の神と綽名ある位であるから、往々夫の敎育の感想をも叩きつぶし、自分は之れ一丁字も知らぬが、今日四十五十の歲になりても少しも不自由はない、男子なら覺えても覺えなくても、少しは學ばせるが宜しい、女子などは無益である、先づ自分が手傳に使はねどならぬ、是迄育てたは夫れが爲であると、屁理窟を並べて、中間より異議を夾みて、折角の父兄の感情をも冷却せしめて就學せしめざる者も今以て少なからぬことゝ信じ

ます。

第四　現今教育法は、單に文字を敎ふる而已で、其修學せしむる科程は、男子と少しも異ならぬ、女子的の教育法は殆んど無視して居る姿と云ふても差し閊はない樣です、故に往々勸誘するも有形の効果を擧げず、單に無形の効益を説くのみで、殆んど幽靈的に敎育の効を知らしむるのみで、如何程舌を爛らして辨説するも、目前の利を以て之を誘導するでないから、殆んど馬耳東風で、少しも顯が無いです。例へば罪證の明白確實ならざるものは、免訴又は無罪の宣告あるが如く、敎育法殊に女子にありては、男子よりも斟酌をなして、其方法を定めねばならぬ、約言すれば、現今の儘であつたならば、女子を仕立つる道具、即ち敎育事項が女子の性情と体質とに適合せず、隨て父兄をして敎育思想を喚起せしむるに欠點がありはせぬかと信じます。

第五　從來の實況を觀るに、外面殊に上等社會に而已着目して、制度の美を飾る爲めに、敎育已に進步し、且又一般父兄も其思想に富みたりと見做して、俄かに强迫的干渉制度を廢して、恰も庭木を年々歲々園丁に委し乍ら、之を怠ると均しく、己に野木然たるものを矯めんと欲するが如く、全く自由勝手に放任し、決して制裁を加へず、今更ら其矯正に困難を感ずる徵證がありはせぬか、別言すれば、一方には誘導的に出で、他方には干渉的を執り度あつた、切言すれば、普通敎育に對しては、何時でも笑ひ顏を以て接し、決して夜叉的の制裁が不足でありはせぬかと云ふ次第も一理由かと思はれるです。

以上列擧しましたものは、私の眼孔に映寫し來る所の主要なる不就學と中途退學の多き原因であります。併し、敎育家の中には、のう／＼そんな原因は一も正鵠は得ない、一般の父兄は敎育思想には充分富みて居る、之れ等は十年前の觀察である、迷夢であると云ふ議論も出で升うなれども、現今もなほ、不就學の多數あるのは、畢竟敎育思想の薄弱か、無分別者かの數項にか過ぎませぬ。（貧困者は無論のこと）果して然らば、世の父兄を誣ふるの囈語でもなく、年十前の舊夢でもあるまじく考へらるゝで厶ります。

借て、之から、以上に列擧した諸原因中尤も主眼骨髓

として視るべき、第四に揭ぐる、即ち、女子と男子とは其性情と体質とを異にするから、現今の敎育令を變更しない(或る條項は改正を欲す)限り、法令の範圍内で、漸次に女子相應の敎育が所望ですから、先づ此の点を一層明細に論じまして、逐次本題に入らんと致します。抑、女子と男子とは、其性情と其体質とを異にすることは、私が喋々を俟たず、諸君は已に業に御承知の事と思はれる、而て見れば、其敎育事項を仝ふす可らざることも亦是認せらるゝは勿論の事かと思ひます。併し、米國的敎育風を心醉崇拜して、我が親愛なる可憐なる日本女子をして日本化せしめず、敢て米國化せしむべしとの卓論を抱持せらるゝ非日本的敎育家に對しては、誠に失敬千萬ながら、斯の如きは私の尤も喜むざる所否な極めて欲せざる所で、私は眞個日本的の女子を養成せんと希望に堪へないで厶ります。日本的女子を養成したいと謂ふのは、彼の擬似米國的敎育家の如く、女子は男子と並肩する、例へば米國では、女子が官吏、會社員、郵便局員其他何々に成つて居る、日本女子も左樣させたいとか、又は、女子と男子とは生殖上の必要に因り、形体を造化が異別にした許りで、他に男女の區別を立てるには及ばないと云ふて、男子と仝一の學業を修め、男子と仝一の針路を蹈ませ、同等に養成したいと云ふ樣な御議論とは全く正反對で、之を約言すれば、女子たるの性情と体質とに適應せる敎育を施し、日常の用務を辨し得る、則ち、家事の整理と、子弟を敎養するに足るの智能と素地とを授けて、實用上尤も捷徑の針路を蹈ませんと欲するの外はないでありますゝ、之を別言すれば、女子には(比較上男子よりも寧ろ實利的主義に基き、生存の狀態に適合せしめ、幾百萬の女子をして普ねく敎育の恩波に浴せしめ、且、又世間一般の父兄をして敎育の効果と必要とを根本的に感知せしめ、敎育をして一層の光輝あらしめ、均等ならしめ、眞個日本的女子を養成して、女子をして益々高尚ならしめ、優美ならしめ、國利民福を增進し、國家の元氣を振興したいと欲するで厶ります。

次に、徐ろ〱と、現今執りつゝある敎育事項其物が、女子には誠に不適當である一、二の要點を述べんと致します。何れの學校に於ても、男女を一團(男

女を區別しあるは極めて稀少)として、同一の教科を試みて居る、即ち學科の首めにある、修身科から吟味するに、教科書は何れも大同小異と假定して、第一實驗修身書の一學年より四學年に達する四ヶ年間の教授項目中、殊に女徳を養成する教訓は、一學年には十餘課もあれど、二學年となりて四五課に減じ、三學年より四學年に進みては、僅々、一、二課位に止まり、之を通觀するに、間接上幾分か女徳涵養に類する項目はあれども、概して之を評せば、男子的の項目で女徳に關しては、只々招伴的に之を挿入しあるのみかと考へられる、斯の如きであらば、男子の事項を捉へて女子にも之を同化せしめんと強ふると均しく、前に述べました擬似的の弊がありはせぬかと思ふ、或は之れ教授法が拙劣である、應用せしめぬである、其教授が巧妙で敏捷であるなら、決して差支はない、女徳養成上綽々として餘裕あり、少しも憂ふるに足らぬと異議も出で升うが、私は是非共、女子には相應の教練を施し、就學當初から女子的の思想を腦底に吹込み、事々物々女子たらしむる方が却て好都合、否な好結果を得ることゝ考へます。第二讀書科で、之は現に本縣にて採用せる各教科書に就て見るに第一學年より四學年迄に、何れも時世の進運に伴ひ、新事實を集めあるも、惜い哉女性に關するものは極めて僅少にして、女子の養成上には殆んど切れ〲の彌縫的教科の如き遺憾があります。殊に女徳に係る項目を授くる場合には男子には必要ならざる感を抱かしめ、雙方共に物足らぬ心地が致します、依て私は、女子には、相應に日常の業務から、家政の整理、子弟の教養に係る事柄より、其他必要の庶物に關する事項を挿入せる女學讀本を授け度思ふです。此他作文科にまれ、算術科にまれ、如何なる學科にありても右述べました主意で同一の考を持つでムります。

以上述べましたのは、男女兩性を同一の場所(教室)に於て教授するときは、非常なる不利益のみならず其奏効の極めて薄弱なるかの遺憾があります。且、又、現今我國に於ける生活の程度と云ひ、日常の衣食より擧止動作に至るまで、何れも盤の上の仕事で、學校にて授くる事項は、或る種類にありては丸で机上の練習で、例へば陸上の水練と等しく、實際に臨

みては一も其用をなさず、却て陷溺せしめざるなきやの疑團が起ります。就中修身科教養の如きは、何れも教師の演說を聽收せしむると一般で、坐作進退の禮節等に至りましても、一々實修の不足勝であります、畢竟之れ智識教練に傾けるの一大欠點と謂はねばなりませぬ、私は徹頭徹尾に、女子は女子的には勿論なるも、日本的女子に躾けたいと考へます、是れから普及法に關する條々を列擧して御免を蒙り度思ひます。

第一　女子と男子とは教室を別々になし、女子には女子的の教練を施すこと　畢まる所は、前述の理由に基き、成し得るならば、一學年より分離したく思ふ、併し經濟上にも非常の關係あれば、或る教練は輪狀的に、殆んど單級制に倣ひて、合級教授となすも、其邊は學校の經濟と教室の都合とに因り、何れに定むるも別段異存なく、唯々特別法に從ひて特殊の事項を授くるの方針になれば、此れ等は細說するの要はなかるまじく考へる。

第二　尋常科の教科目中にも裁縫科を加設すること　本科を加設するものは、就學の僅少と遞減の原因とに基き、實利的教育を施し、教育の効能と必要とを有形的に感知せしむる唯一の機關となす、一層切言すれば、裁縫機織は女子の專務で、是非嫁娶前に、一通りは父母の義務として覺えさせねばならず、尙、養蠶等の仕事もありて、家政の整理には、女子は男子よりも實に困難の事情が多々あるです、男子は、農、工、商何れの業務にあれ、父兄の指揮を受け、且つ、之を見倣ひつつ出來得るは勿論、別しても多數を占むる農家にありては、縱令不作あるも、氣候の變に依りて斯の結果ありなど口實を拂ふることを得るも、女子の仕事に至りては、爾かく寒熱の變に塗り附くるを得ず、是非共熟練を要する者が多く、特に女子は、何れも男子より家內の雜務に從事せねばならず、尙、父母の膝元に居ること極めて僅少の年月のみ、去りとて、今日、日本の狀態に照さば、歐米諸國の如く、自己の義務に勵するものは一々習得したる上に、任意の配偶を求めて恥ぢぬ風習とは異にして、先づ父兄の認許と媒介とを待ちて成人する實情なれば、遲くも早くも夫れ迄には右の業務は修練せねばならぬ、故に、今之を加設して尋常より高

等に連絡して、該科を課し、父兄の義務中學校で一肩持つて心配を分任せしむ、父兄も進んで、一、二年間の勉學は敢て拒まざるのみか、喜んで之を果さしむるに相違なきことゝ考へらる。斯くしたなら、就學勸誘上にも莫大の奏効あることゝ信じます、次でに之を課するには三學年位より少時間を挿み、漸次其練修時間を増加するであります。

第三　尋常高等を一校に併置すること　之れ女子の就學を目今の實情に徴するに、何れも尋常高等分立して、高等科は多少隔離の地に設置あるを以て、高等の教科を習得するものは僅少なり、つまり尋常科位でも完全に義務を果すものは漸次遞減するの狀況なれば、本科を完ふせざるものは勢の免れざる所、故に前述の第一、第二の設備に基き、終始一貫の方法を講じ、修得の便を謀ることゝし成るべく、連絡を欠かざる統一的の教練を施すは極めて切要の最急務たるべき次第である、併し土地の狀況と、町村の資力如何に由りては、聯合區を定めて之を施すは特別となし度き考である。

第四　師範學校女子部を擴張するか乃至は郡費を以て女教員の養成と奬勵とを行ふこと　之れ第一より第三に至る新設の科目と、教育の仕方を一變するとに由りて、女教員を要する少數ならざる故に、其需要を充すに必しも急務たることである。

第五　基本財產蓄積法を規定すること　本法を規定して町村の自由に一任せず、法令を發して實施せしむ。例ば毎學年度には、教育費の豫算を編成し、其經費を議決し置きたる、凡て教育費の餘剩金、及び目下講じつつある良法の蓄積の方法を實行して、漸次普通教育の基礎を確立して、學校は一の偕樂園にして、着々として學校の教育を受けざるものは、人にして人にあらざる樣の感覺を一般に喚起せしむる樣學校教育の勢力は、舊時の崇佛的と比敵せしむるを努むるは今日の急務かと信ぜらる。

第六　學校設備法を勵行して校舍の增築又は新築を決行し、其他の教科用具をも裝置せしむること

以上列擧しました條項は、一見すると甚だ實行し能はざる樣なるも、私は此の數項を、一時に俄かに之を實行せよと云ふに非らず、漸次非急要なるものより及ぼして、實効を奏したく思ふです。故に、此等

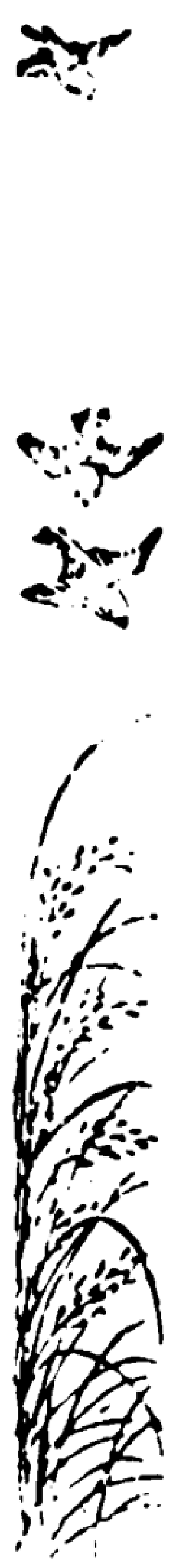
の諸項は、積極的の方法として研究したつもりである、夫れで第一の希望する點は、女子には性情と体質とに適合する事項を教棘して、着々歩を進め、實利的主義を執り、世間一般父兄嗜好をして稍滿足せしめ、同時に女子其者をして嚮學の念を篤からしめ、競爭的に就學の義務を果さしめ、不幸の境遇に陷りつゝある可憐なる女性にして、一層高尚ならしめ、優美ならしめ、健全なる人類の母として、名譽ある國家の基礎として、當今其女子的教育を確立するにあらされは、國家の不幸之より大なるはなく、社會與個の文明は得て期すべからざる事と存じます。返す〴〵も、女子には平生執りつゝある所の業務は、家政を整理し、衣食を供し、子弟を養護することゝ、家內に於ける病者等の看護に係る凡ての倫理、衛生、社會上に關する諸般の事情に通せしめ、抽象的學術に關することは省略して、男子よりも女子の教育は寧ろ實利的主義に則り、生活の狀態に近似せしめ、人倫の大法に適合せしめんことを大主眼として希望するの外は、他に胸中一物も無いであります。而して斯く積極的方針を執りつゝあるも、尙は一般が舊態を墨守して義務の履行を背んせす、實際其女子を愛し乍ら、目前の小利に眩惑せられ、且は無理由で、女子をして幼少より勞役に就かしめ、之が爲めに教育を無視し、輕蔑し、幾百萬の子女をして、不學の徒となり、不文の輩たらしめて、耻色なきものは、個人の利益は勿論、國家の進運を沮喪し、國家の元氣を顧みざるものは、國家の權能上正さに强迫的に充分の制裁を加へて、快刀亂麻の處斷を施すは之れ亦必要欠くべからざる條項なりと信じます。依て、私は、更に消極的の方法として、一、二の條項を列擧して、教育家諸君の高論を仰ぎ、更に研究を盡さんと致します。

第一　傭役勞働の規定を設くること　從來の慣習に因りては、七八歳位より子守其他の役務に服使して、幼者の教育を無視するの傾きあり、故に、例へば十歳以下の幼兒を職業上、又は其他の勞役に用ひることを禁じ、其十歳以上の者は學業證書を有するものゝ外、之を使役することを禁じ、尙之に附隨の規定を設けたいと云ふ考へです。

第二　罰則を設くること　幼者をして教育を受け

しむるは父兄の義務たるは勿論なれど、義務擁保者は、特別の理由に因り、就學の延期又は免除を官廳より許されたるを除く外、此義務を怠るもの丶罰則を設けて、どし〳〵勵行する、即ち現今の就學督責規則に充分の制裁力を加ふるも亦必要かと思はる。

第三　表示法を決行すること　正當の理由なく就學の義務を怠るもの丶族籍姓名等を詳細に調査して、市町村役場の前、又は其所屬の學校掲示場に掲出すること、國税怠納者を處分するの筆法に傚ふも、亦消極的方法の項目中に置くも如何かと思はる。



明治三十年女鑑歌文兼題

五月
- 五日　歌…新竹……文…新茶を送られし返し
- 廿日　歌…夕水鷄……文…蛙を聞く

六月
- 五日　歌…曉郭公……文…雨中友を待つ
- 廿日　歌…夏懷舊……文…朝顔

七月
- 五日　歌…山内一豐妻…文…作文の添削を乞ふ
- 廿日　歌…遠村白雨……文…池蓮

八月
- 五日　歌…綠陰散歩……文…海邊に遊ぶ
- 廿日　歌…雁信……文…團扇

九月
- 五日　歌…野邊萩……文…鷹の畫を見て
- 廿日　歌…松間月……文…辭書の撰擇を乞ふ

十月
- 五日　歌…籬菊……文…祖先の祭日に友を招く
- 廿日　歌…海邊紅葉……文…茸狩の記

十一月
- 五日　歌…深夜の時雨……文…長〳〵病み臥せる人に寄す
- 廿日　歌…落葉滿庭……文…新嘗祭

十二月
- 五日　歌…遠山雪……文…友人の非行を誡むる文
- 廿日　歌…田家歳暮……文…爐邊閑話





四月廿日兼題　對花言志

天

あはれ〳〵今年も花にれくれけり
いつか我か身の春となるらん　廣島市稲荷町　香川穎子

地

なからへの今年もはるの花をみつ
うれしきものはいのちなり皃　三重縣伊賀國阿山郡府中村　服部かつみ子

人

知るやいかにろらふく風も春雨も
花ゆゑにこそおもひはびしか　淺草區新福井町貳番地　吾妻ちか子

人

こゝろなき風になちりそさくら花
家路のつとにいさやかさゝむ　麹町元園町一丁目六番地　戸塚てつ子

秀逸（十首）

年ごとにわかぬ色香のはなをみて
人のこゝろもかかれとそ思ふ　徳永萬壽子

ひと日たに永かれとこそ祈るなれ
人のいのちとはなのさかりは　田代艶子

神代よりかはらてにほふさくら花
うへ日のもとの光とそなる　河野文子

いたつらに世を過しきて老し身を
はなにかこちて花を見るかな　山本つね子

年としにいやさきまさる庭さくら
人もかくこそあらまほしけれ　山本のふ子

咲き匂ふさくらのことく我もまた
かくはしきなをよに殘さなん　西艶子

心なきはなにむかひていたつらに　日高かす子

ふりゆく身をもかこちける哉

ひとみなの終日見れとあく世なき　粂子りね子
　花とわか身もなりみてしがな

わたなりと諷ふ人こそわたなれや　松岡はま子
　花はころにもかはらぬものを

吹く風によしやちるとも山さくら　廣田とめ子
　こゝろの花はかはらすもかな

（以下原稿到着順）

咲く花のかけふむ路の八ちまたに　佐々小琴子
　思ふこゝろをわかすられしさ

朝はらけ起きいてゝ花にうち向ひ　佐々有鄰子
　こと葉のはやし奥をきはめん

さくら花みるにつけても長閑なる　木川里子
　わか日のもとの國そたのしき

のとかなるさくらのもとに打集ひ　仁保基子
　ことはの花のにほひくらへん

足引のやまふところのさくらはな　井出すゞの子
　をりねしときは嬉しかりけり

山さくら見るにつけても埋れ木の　鳥居藤子
　花咲かぬ身ろかなしかりける

奥山のはなのさかりのしたはしく　長田年子
　とひ見ん物とたとりきにけり

言の葉のあまりてたらぬ心には　有坂清子
　花をかこちてはなをみるかな

春ことに見るはなながら春ことに　名取正代子
　いやめつらしき山さくらかな

わか心かゝらましかなと思ふかな　坂田きみ子
　花のいろ香はあく人もなし

我業はさたまりぬれとれこたりて　武田環子
　花にもはづるこゝちこそすれ

さくらはな咲く山かけに庵しめて　田代綾子
　いのち長くもなからへて見ん

のとかなるよをへてしかな櫻はな　永井さい子
　打みるけふのこゝろなからに

さかりなる花の木影にあそひつゝ　仁井田富子
　思ふことなき今日にもある哉

時しあらはちるをゝしまぬ心こそ　羽田三緒子
　大和のはなの色にはあるらめ

としことに憂きをさくらの花みつゝ　太田貞子
　このしたかけに春を暮らさん

雨に咲き雨にうつろふ花のいろも
こやよの中のならひならまし　田島　篚子

ふたつなき日本こゝろのさくら花
かざしてかをれ千よのたみ艸　杉浦よし子

咲きにほふやまと心のやまさくら
はなは皇國のひかりなりけり　中山　富子

としごとに御代の光りとさく花は
我か日の本のさくらなりけり　中山嘉壽子

いろもかも世にすくれたるやま櫻
わかきこゝろを我はめてゝん　富士村幾子

色も香もうつろふ物としりなから
花にうかるゝひともありけり　花山やす江子

櫻はなさきのさかりをみるたびに
先つれもはるゝ宵のあらしを　花山みさを子

色も香も花のさかりのつかのまよ
あすをもまたて散るそうたてき　花山きのと子

春ことに匂ふさくらをうつしうゑて
人のことはのはなとなさはや　美奈井よし子

見るたびに心のくもゝはれぬれは
花は我か身のともとこそなれ　春永己巳子

春いなは根にかへるてふ櫻花
とむるよしなしけふの長雨を　竹村てい子

かくしつゝ世を盡さはや朝つく日
こずゑに匂ふはなかけにして　青木　糸子

一日たに匂はましかはさくら花
とく散りぬともなにか歎かむ　西川　順子

うらゝかに旭ににほふ山さくら
いつしか我を花となすらん　森　雪子

我こゝろよしのゝ山のはななれは
異くにまても知られなましを　森　國子

いく春やさきにほふらん色も香も
むかしなからの庭さくらはな　羽室　象子

よしさらはちるともにほへ櫻はな
はるのなこりの思ひ出にせん　田中ゑん子

ふりにけるれいか心もうごき出て
嬉しきものはさくらなりけり　住山　幾子

かざしつゝ遊ひし人のしのはれて
あはれみにしむ花のしたかけ　山本きよ子

こゝろあらは花やうたてく思ふらん
さかりはかりに人はとひ來と　高内よね子

咲き匂ふ花のこかけにやとしめて　藥師寺雪子
長閑けきみよにおふそ嬉しき

春かせにほころひ初めし山さくら　榊原八千代子
いろは昔しにかはらぬものを

うつろはぬ人のこゝろの山さくら　土肥　仙子
はなちるへくもれもはねぬ哉

いつくとも處わかねとのとかにも　小町谷里江子
花みるけふをわか世ともかな

年ことにはなの色香はまさるなり　小町谷園子
人のこゝろもたゝかくしこそ

たくひなき色に匂へるさくらはな　周防　牧子
荒しにちるとしるやしらすや

大方の世のうき事やなからまし　山田　瓊子
花見る時のこゝろなりせは

としふれとかはらぬものを櫻はな　中川みさを子
身はうきふしの樣々にして

花を見つ花に見られつあはれまた　安井うめ子
今年のはるをすこすことかな

名にしれふはなのみやこの大井川　綿野りき子
なかるゝ淵もうちにはふなり

世のなかに花の色香のあれはこそ　西元とも子
人のこゝろものとけかりけれ

ことしたに散らてあらなん櫻はな　岸田はつ子
心のかきりめてはやすへく

やまさくらけふ九重にさきいてぬ　打田いろ子
これそ御國のひかりなりける

庭の面の花はむかしにかはらねと　長山　孝子
身のうき事はまさりけるかな

咲きしより日毎〳〵になつかしく　星野かず子
夢にもはなのちるそわひしき

いましはしちらすあれかし櫻はな　星野ひと子
友うちつれて明日もまた來ん

花さかりしなとの神もこゝろせよ　星野康世子
明日も賴みはかけられぬ世そ

年ことにかはらぬ花のいろみれは　桶口はる子
むかしのいとゝしのはるゝ哉

いさ櫻われもやまとのはななれは　福原　菫子
となにゆかしき香を止めてん

花みなのみのるを見てゝ我もまた　仁保志磨子
文いはやしの實をむすはなん

のどかなる春の盛りにさけはこそ
花はよにしもめでらるゝなれ　尾立登美子

咲き匂ふ春にたぐへてうるはしき
名を千代までも殘してしかな　川崎　晴子

心さへのどかになりぬれもふこと
花にかたりてすごすはるへは　諸井久良子

ちらさしと心つくしのさくらはな
春をかぎりとさだめずもがな　館脇ます子

いつまでかみつゝかたらむ櫻はな
あだになちりそ風さそふとも　田中　冬子

うき事のかたる友なくなぐさむは
花やこゝろの友にし有るらむ　柳田　里子

見る人もなきみやまろのさくら花
咲きてもさぞなわびしかる闘　石川るゐ子

もろひとにすめらみ國の花とまで
めでらるゝこそ嬉しかるらめ　石川きむ子

我が宿にうつしても見んさくら花
けふより長くともとちぎりて　後藤のぶ子

羨やましみやこの人ははなかげに
ともと語らふこともありなむ　牧山きよ子

あけくれに目かれず見なん昔の
まゝに匂へるはなの一もと　伊藤　清子

いかばかり嬉しからまし咲き匂ふ
はなの枝をることのありせは　伊藤貴美子

大かたの人のこゝろの實なきをも
かつれもはゆるはなの上かな　景山　親子

とつ國に咲きにほふとも日の本の
さくらにまさる花やなからむ　下元もと子

をることにいやさきまさるやま櫻
れのかことはの花はしからす　野中あさ子

花蔭にかたりかはしてれもふかな
かくて千歳も經なはうれしと　上原のぶ子

咲きにほふ花を見るにも思ふかな
よにしられさる身の悲しさを　上野　君子

咲きにほふ花にこの身の露はかり
似むは人にもめでられましを　宮地　琴子

年ごとに花の色香はかはらねど
替るは人のすがたなりけり　穴澤　松子

さくら花にほふみ國に生れいでゝ
さかりのみ代にあふぞ嬉しき　三谷起美子

植ゑおきし庭のさくらはさきにけり
いつか我みはよにはふらん　[illegible]木治子

花の香にゑひつゝ愛にまろねして
あすもまたみむ山さくらはな　萩原章子

咲けはちる常なきはなど思ひては
月日もあだにすぐされぬなり　小島ろく子

さくら花君のみいつしともろ共に
とつ國までもかゝやかしてん　大谷津こと子

いつしかと待ちて日をへし櫻はな
けふ嬉しくも咲きそめにけり　植木とよ子

見る人のこゝろいさますさくら花
今そさかりと咲きみたれたる　石川すけ子

春雨のかゝるさくらにあらねども
年をふるにもそてはぬれけり　林つや子

いたつらに年を過せしわか身かな
さくらなりせは幼なきものを　林つね子

はることにいや咲きまさる櫻はな
國のひかりとにはふなるらむ　山崎しつ子

人みなはめてつるものを山さくら
見れはわれのみぬるゝ袖かな　矢島ゐい子

咲きそめし花をなかめて思ふかな
人のこゝろもかゝらましかは　森野梅子

さし登るあさ日にゝほふ山さくら
おのかこゝろを花になしても　中村榮子

吹くかせもいとはすさけるやま櫻
わか日の本のかさしとそなる　長谷川まさ子

何事もこゝろのまゝにならぬ身も
花見るときはたのしかりけり　佐藤きよ子

世の中に花見てくらすこゝろほと
たのしきものはあらしとそ思ふ　佐藤やす子

散れど猶たもとにのこる花の香に
ならはまほしき我こゝろかな　林久子

わか心はなのかかみにてらしなは
いかにみにくき隈やうつらん　三嶋みさ子

年ことに盛りかはらぬさくらはな
おいゆくものはわかみなりけり　下田ひろ子

さきそめし櫻をみてもしのはれつ
はかなくちりし大和ますら夫　佐々木つね子

いひしらぬうさやへぬらん櫻はな
春はにしきにみをかされとも　黒瀬森惠子

四月廿日兼題　臺灣へ出で立つ人を送る

地　下野國日光町　黒瀨春惠子

いよ〳〵近きほどに、御やから御一同、雲の外なる臺灣へといでたゝせ給ふれそむき、いかに同じみくにの中とはいへ、なま外つ國の心地せられて、御名殘をしきも一入に侍り。あはれ此後は、雲井はるかにたちわかるとも、折々ふるさとの空をも思ひいでられ、かりかねのつてにかくる御玉つさ、おくりこし給ひてよ。かの地は氣候食物など、いみじうことなるふしもさはならんと存じ侍れど、御身の程、ゆめゆるかせになし給ひそ。今日は、御なごり惜しきにむね迫りて、筆も心に任せねど、聞えたきことども、後の便にとかきのこし侍るになん。かしこ。

人　大坂高麗橋四丁目　山崎玄つ子

此頃、人つてにうけたまはり侍れど、そこには、このたびたいわんへ物せさせ給ふとか、唯月花にうかれあくがるゝたぐひにはあらで、世の爲國のためをはかりて、海山の遠きもいとはず出で立ちたまふ君がみ心こそ、いとも〳〵をゝしけれ。されど、神佛もまもらせ給ふへければ、遠き浪路も安らけく、また御望のことゞも、かならずことなくなしをへ給ふべけれど、彼地は、寒さ暑さの程も、こゝとはことなるべければ、よく〳〵心したまひて、まめやかに志したまふ筋をなしをへ、御身に錦をとりよそひて歸りきまさん日を、今より指をりてまち奉るになん。

人　大坂市北區富田町百拾四番邸　兼子りゑ子

人の心ぞかし、あやしきものはあらじ。陸地ならんには、山川遠く立ち隔てたりとも、左は思はぬを、海隔てたりと聞きては、何となう心細けなるに、まして八重の潮路を遠く立ちはなれて、臺灣に渡り給ふよしなれど、そが別れ路の心細さは、ただならんやは。されど、殊に大やけの重き任をおひ給ひて、面たゞしき御出で立ちなれど、いかで歎きてのみやはあるべき。浪路つゝがなくおはしたらんには、彼の國の民を厚き御惠みの露にうるほはして、はかある務をつくし給へや。また暑さ寒さも、都とはいといたく異にして、惡き病さへありときけど。國の爲、家のため、萬に能く心し給へよ、さて、事なし終へ給

はん後に、錦をかざりて、とく歸りまさん日を、今より待ちわたり侍るぞかし。

（以下原稿到着順）

山口やす子

山も長閑に、浪風も和ぎぬれど、遠き海路もいと穏なるべく。今日しも舟を霞が奥に漕ぎ入れ。明朝は伊豆國遠江灘の數々經過ぎて遙か水雲のよそに浪路を隔て給ふらん、年月の親しき友に別るゝはなか〳〵にねえのどぬ心地のせらるれども、深き道に志ざゝるゝと聞きては、とゞむる島もなき渡る厂のつどさに消息を傳へさせ給はんほどをこそ、少しは慰むるよすがともせめ上野の園の櫻の春、隅田の川の月の秋は、誰と共に詠めて心をやらん、さても君が行く高砂の島とやらは、かしこくも　明治　天皇の御威を受け、森風の豊かなる恵を載き居れども、まだ徭の野山、いどらの道のみにて、瘴氣も四方にふさがり、氣候の難みも多しとかや、されど雄々しき御氣性に、健なる御身なれど、兎や角の事などあるべしとは思はねども、名に負ふ高砂の松の千歲をこさんまに、歸り玉はん事を願ふになん。

名取正代子

かへりみれど、はや三とせのむかし、彼清國より、我皇軍の勝得たるしるしに奉りたる臺灣、其島人、大方は我大君の御惠の露にうるほひ、我國ぶりのめでたきを知りたるも、いまだかたくななる夷どもの、なきにしもあらざるべし。いでいかにせむやなど、とやかくやと、共にかたらひなげき侍りしに、このたび、君には、いよゝ雄々しくも思したち給ひ、彼地にわたらせ給ひて、臺北縣なる日本語學校に御赴任あらせられ、はやうも我國ぶりを彼地に移し、皇國の美德になつかしめんとの御志、うれしくもおぼしたち給ひけるものなか。けふの御別は、いと〳〵をしう侍るも、皇國の爲、いかでとゞめまゐらすべき。彼地の島人も、いかばかりよろこび侍らんかし。はやうつゝみなう渡らせ給へや。さはさりながら、彼地は氣候もいと異なりと聞き侍れど、雨のあした、風の夕、はたよろづに、御こゝろし給ひてよ。事なくとも、みいとまの折々は、消息給ひてよ」とまれかくまれ、けふの名殘は堪へしのび侍るべくなん。あなかしこや。

花山やすゑ子

うけたまはれは、貴方樣には、御國のために、臺灣島へ御出て立ちあろはされ候由、壯んなる御志の程、御祝ひ申上參らせ候、然るに、臺灣とやらは、氣候も不順にして、惡しき病もはひこるとの事に候へは、何分御注意あそはされ、御壯健にて事業に御從事、御國のおんために盡力あらせられんことを、ひたすらいのり上げ參らせ候、何卒御志をも充分に御遂けあそはされ候上は、無事にて、目出たく御歸鄕あそはされんことをも、あはせて願ひ上げ參らせ候、先は此の度の御出て立ちをほきまつるまてになん、あなかしこ。

井澤たを子

あはれ我がいとこ眞川のぬしには、雄々しくも思ひたちて、かすみへだつる大海のあなたなる、高妙の島にたびだゝせ玉ふときく、己れ馬の鼻向せんとて、胸にあまるくさ〴〵の思ひ、おしゝづめて、一言まうすにこそ。おもひまはせぞ、われら、たらちねの親にかしづきて、育て擧げらるゝ折より、たゞはらからのやうにすぎこしものを、長き年月の程には、さりあへぬ事の障りにもかゝづらひ、辛らき憂き目にも遭ひぬるを、それをしもよく耐へ忍びて、こたび、はしきぬしには、遠きあなたの、たはやすくはゑあふまじき所なるを、ゆだねまきゆゝしくとも亦ゆかし。されど、君のまことに幸ある身にますを、誰かこれをめでまつらざらむ。まいて、われは、ことことにもあらぬ中なれど、自のやうに覺えてなむ。春の花秋の月見などは、云ふも愚なり、朝な夕なに語りあひ、物學びの道も、年まねく君の惠にうるはひていそしみけるを、あしがきの思ひ亂れて、今よりはいかにさびしうすさまじくやあらむ、げに行く末の思ひ遣られてあはれなり。されは、君がかぐはしき名を天の下に輝かし給はむ出で立ちと思へど、また、なか〳〵にうれしうたのしくもあるか。されど、今は女々しき心に、さにづらふ君の別れを惜まじ。暑き寒きに心みだれす、只一すぢにおのが志をつとめはげみて、さきくませ、わが君よと、ねぎ奉るになむ。

佐々有隣子

臺灣島は、わが國の軍人等が、征淸の末に、淸國王

がさきで奉りしより、皇國の版圖になりけるものから、守備兵は更なり、縣官を置かれ、縣治を司どらしめ給へれど、鄉村には、學校を設立せられ、教員をも、師範校の卒業生を、あまた撰擧して派遣せらるとか聞きつるに、將しかり、妾が金蘭の友がきとしたひ奉りし白雲悠々軒の主君も、此度の撰にあたりたまひぬ。あなめでた、あなよろこばし。かゝる撰に擧げられ給ひ、數萬の蕃人に、皇國は神代より萬世一系の皇統にて、地球上無比の本國なることを教示し給ひて、漸々益々忠孝義勇の青年を造り出し、佳名を揚し、故鄉に錦をかざりて、かへり來まさんことを、朝夕待ち奉りになん。

松村とし子

承り侍れば、こ度御父君樣には、臺灣へ御出張仰せ出され、それの日、新橋御出ましのよし、誠に存じもよらぬ事に候。君のため、皇國のためとは申しながら、かの地は、なか〳〵に氣候のあしきよし、さる方より承知致し申し候。數ならぬ身、申し上ぐべきにもあらねど、かへす〳〵も、御道中は申すべうもなく、御身のうち、御大切に遊ばさるるやう、よしなに御申し傳へ給はり度、恐れながらねぎ參らせ候、何れ御たち出での折には、停車場迄にても、御見送申し上げ度ねんじ居りまゐらせ候かしく。

岸田はつ子

君には、近きほどに、臺灣へ學びの道を押しひろめんため、御渡航なし給ふよし承り、かつは驚き、且は嬉しう思ひ侍り。さるは、日頃、此のわざにいたくいそしみはげみ給ひし御心に、彼の地は、新に得たる所とて、いまだ御國の手ぶりにならはねを、いみじう歎かせ給ひし折しも、このたび、公より、ことに撰まれ給ひて、いよ〳〵出て立ち給ふことよ。君の御よろこびは申すも更なり、御父君の御よろこびは、如何ばかりにか、推し計り參らするも中々にこそ。さるにても、かしこは、氣候もこゝとはたがひ、且、惡き病さへはやるとか言ひ侍れど、能〳〵御心し給ひて、日ごろの御心ざしを遂げ給ひ、こよなき績をあげ給はん事を願ふになん。まゝ彼の地にいたり玉ひては何くれと、こゝには見しらぬ事を見あつめし給ふらんと、返す〳〵も羨しうなん。いかで、一日も早く歸り給ひて、かたはしをだに、かひなき身も、

うけたまはらまほしうこそ。あなかしこ。

三谷起美子

承り侍れど、こたび尊きあたりの仰せをかうぶり給ひて、臺灣島の守りにも、出で立たせ給ふよし、もとより、大和ますらをのかゞみと、名に負ひ給へりし君の、此度は、一しほはえある心地し侍りて、いと〳〵うれしうこそ。されど、かの島にも、とく〳〵山櫻のかぐはしき香を匂はせられて、やがて、今にも、ましたる御いさをゝ負ひ持たして、まさきく歸りまさん日を、今より指折り數へ待ち侍るばかりになん、あなかしこ。

都部壽子

文して申上候、今度近き程の船便にて、臺灣へ御出ましの由承りまゐらせ候、誠や千里の道の遙かなるにも優り、海山遠き旅の空、御もの憂さも、さてこそと推はかり参らせるを、露いとはせ給はで御進みのよし、御勇健のほど、御末たのもしく存まゐらせ候、尙又あなた樣御上を推し候へど、能うぞ〳〵御手放し遊ばされ候御事に候、平群廣成郷の母御前の、我兒はぐくめ天の鶴むらと詠玉ひし御心ざし、取も直さず、あなた御上にこそと、此方一同申しあひ候、されど頓てのほど、御家の風をも吹せ玉ひてんと、御羨しく存まゐらせ候、尙御見立申度候へども、折惡く用向つどひ候まゝ、御無沙汰致候へ共、御免被下度、尙乍憚時候御いとひ遊ばされ候樣、念じまゐらせ候かし。

矢島はい子

其後は如何に御暮しなされ候か絶えて御無禮申上候、此度重き仰を蒙りたまひて、はる〳〵臺灣にかしまたちせらるゝよし、まことにおどろき入候、さはあれ日頃の御望に候へど、御名殘りはつきず候へども、御よろこびのほど御察し申上候、先頃其地よりかへり候ものゝ話に、土人等も、日本のあつき御惠にうるほひて、軒には日の丸の旗ひらめき渡り、命にかへてもといひし辨疑をたち候ものもありとの事、よろこばしき事に候、かほどまであき島の大和心の櫻花のにほひをかをらせしは、わがつはものゝ、草のしとねに夜をふかし、あら風あらき青海原に、敵の軍艦うちしづめ、虎伏す野邊に屍をさらし、御かげと仰がれ、ゆゝしともゆゝしく存候、申上ぐるもをこがましきわざには候へど、常に御健やかに渡ら

せられ候も、風土も替り寒暖も同じからず候へど御身大切に遊され候様ねがひ上候、士民らも、未だ全くわが徳になびき候とも思はれ候はず、御勤め御困難いはむ御察し申候、されど寛き御心になつき候て、御代の泰平を謡ふもほどからぬと存候、まづは唯々御平かに御渡り遊されん御無事の御報を待ち上候、かしこ。

佐藤きよ子

先つとし、君には、徴兵のことに、當らせられ、恐多くも、天皇の、御ひざ間ちかく御國を、まもらせられしに、此たび御母君より、承り傳れど、また〳〵台はんへ守備隊とやらのつかさにて、なみ路はるかに、いよゝ、此うへきはすゑの方、多くのつはものをひきゐて、彼の地へ渡らせ給ふよし、まことにこよなき、勇ましき事なりと、妻も男子に、ありなばと、日頃思ひしねんの、いとゝまさりぬ、君には、とくしろしめしたまふらん、彼の地は、あしきやまひ、いと多く、よそくにより、わたりし人は、大方は、そのいたつきに、をかさるゝよし、聞はべりつれば、君にはいとよくこゝに、御心をつけさせられ、れん身を健かになして、あつはれきよき、いさををたてゝ、眞心の、にしきをかざり、一日とも、早く、故郷へ立ちかへり、あめつちのあひだ、只の一人の御母君に、御孝養を、つくされん事こそ、あらまほしけれと、おもひたまふるまゝ、いささか妾か思ふふしを、一言かくなん。

廣田とめ子

臺灣の、我國の境にいりて、大君の惠の露に霑ふこそ、その人くさにとりては、いかばかり幸ならめ。しかはあれど、たて虫は其からきをしらずと、常に騷々しきは、愚なるにや、頑なるにや、かくながら、拾生は御國の爲、千年の後の謀にあらし、古の人も、教へてのちに法を行へといへりしこともあれば、君には、こたびかしこにいたり。義を説き道を教へ、皇國の爲かたきを知せまほしくれはして、今日なれし古里を立出て、親しき友に別をれしませ給ふことゝなれり、あな勇ましとも潔しともいふべし。庭櫻の美はしきは、愚なりとも誰かは仰がざらん、のどけき東風には、頑なりとも門の柳のいかでなびかざらん、さはいへ、庭の櫻の咲出て、門の柳の打なびく

雅も、夕の霜朝の雪の冬をへて、後にこそあれ。言の葉もかよはず、人情も異なるかしこに、教の道を開くことの　いかでかたやすからん。ことに氣候惡しく、病多しと聞く、御國の爲、攝生怠らず、健かにいそしみ給へ、つとめ給へと、一言かくなん。

林　久　子

なにごともおくれがちなりし臺灣島も、我御國の領し給ふ所となりしより、大きみの惠の露にうるほひて、日に月にひらけゆくのみならず、物産の多きこと、たぐひなきよしにて、心あるきみには、とくより眼をつけさせられ、一の事業をおこさんと、かねてのたまひし事を取り侍りしが、明日は、いよ／＼此地を出立せ給ふよし、實に御國の爲御家のためと、祝ひ侍りぬ。かねて、實業に御熱心なる上　萬の事になれさせ給へど、遠からず業をとげさせ賜はむと、れしはかり侍りぬ、はかなき女の身にはべれど、君かたすけともなりなん事も侍らで、いひおこせたまひてよ、我が及はん限りは、此處より御力ともなり侍りなむ。あなかしこ。

蒸汽車

田口志げ子

うつの山をうつゝともなく越えし、いにしへ人もありしに、御代の開らけゆく、まゝに、蒸汽車といふものの外國より渡り來りて、遠き旅路も夢のまに行きかへり、いとはるかなる、國々も近き心地のせられぬ。あしたに、隅田の花をめて、夕へには松島に月を賞する、などこそうれしけれ。この車よ、石炭を、たき湯げの力もて、あまたの人、多くの荷どもなにくれとつみ、鳴神よりも、おどろ／＼しうなりひゞき、こなたにあり、とおもふまに、はやかなたにいたりて、つはさある鳥もおよびざるべく、足よつある獸といふとも、またはしりまけぬべし、あはれいとあやしくもとくはしる、この車よ、くすしくも造られしこの車よ。今は、東のはて、西のくまに、至るまで高山は堀りうかち、み谷には、橋を渡し、この車の通路は、蜘蛛の糸のごと、かゝらぬくまもなかるめり。あはれ古しへ人に見せましかは、神佛の作業とやおもはん。かはれかはる、世のさまや。

新聞紙　櫻井はる子

すゝみ行く御代には廣き世の中を
一目に見するふみもありけり

鶯　松浦てる子

春きぬと巳がふるすをうちすてゝ
たとつれ顔にうくひすのなく

山路梅　日高かず子

柴人もたきゝにさしてかへるなり
やまちのうめや盛りなるらん

櫻　前田菊千代子

世の中にはなてふ花はさはなれと
さくらの花にしくはなぞなき

早春柳　河野文子

春あさみ松のみどりもそはぬまに
青むやなぎのめつらしきかな

和氣公　小川直子

祈りける君がまことのつらぬきて
天つ日嗣もたゆすそありける

旅宿夢　諸井食子

旅ねするやどは夜毎にかはれとも
ゆめは都をはなれざりけり

堤柳　矢野うめ子

すみた川つゝくつゝみのすゑ遠く
かすみになひく糸やなきかな

野雉　仝

子を戀ひて尋ね入るらむ夕かすみ
つゝむ野すゑに雉子なくなり

海上春望　山田瑋子

あら汐の汐の八重路ものどかにて
かすにうかふ蜑のつりふね

籬外梅　住山幾子

玉たれのをすのひまもる春風に
にほひゆかしき梅か香ぞする
窓のとの梅さきにけりたますたれ
かゝくる妹のそでにはふまで

陳忠　有坂清子

よの中の人にまけじとむらきもの
こゝろの駒にむちをこそうて

●文林

八首　長谷信成
三五首　宮地厳夫
七首　竹屋光昭
四八首　坂正臣
五七首　小出粲
一首　本居豊穎
五六首　諏訪忠元
一九首　千日亮
四首　高田顕允
一首　田中道磨
三首　酒井忠雄
七首　北條久政
三首　津守國美
一〇首　中島宮門
四首　松岡調
八首　松浦詮
一首　佐藤郡順
一首　近藤政寛
一首　岡部譲
二一首　高岡殖美
三一首　谷勤
十八首　光岡正彰
七首　遠山操
二八首　片岡正占

一首　長谷信篤
七首　松本高明
四九首　植松有經
三六首　大口鯛二
一二首　鎌田正夫
二首　有住齋
一首　諏訪忠誠
一首　大畑德資
一首　鈴木千別
一首　和田正雅
三首　柴田顕光
一首　上杉義順
三首　野崎宗英
一〇首　勝家貞眞
一七首　黒川眞頼
一七首　松浦辰男
四首　篠原政訓
二首　石山基正
一五首　藤井行麿
一首　波渡里重清
一首　彌石宗孝
一五首　西川須賀雄
五首　片岡正士
一首　眞崎雅茂

一〇首　森馬太
二〇首　上地信光
一首　西島信英
二首　内藤潔聚
二首　小田清雄
五首　平塚睢旭
一首　鈴木榮
六首　猪熊眞澄
一首　武谷水城
六首　木村啓
一首　林信臣
一首　神本國臣
二首　都々直一如
一九首　三輪義方
三首　大町芳衛
一三首　宇野豐道
六首　井上頼文
一首　有吉秀太
一首　森致治郎
一首　齋藤乾
七首　花井公醇
一首　矢上浦三郎
三首　關大久綏
一首　坂本德一郎

一首　尾坂廣文
二首　宮田馬太
一首　倉田安國
一二首　石丸忠胤
二八首　内藤伊守
二三首　師岡正胤
一首　大槻季夫
一首　細澤良恒
一首　井口隆太郎
二七首　林甕臣
八首　小澤孝民
一首　久高直澄
四一首　三浦千春
一首　鹽井正男
三四首　京野隆道
八首　大畑弘國
六七首　佐々盤水
九首　永石節文
一首　土子豐治
一首　松島花盛
七首　三上一彥
一一首　糸山貞幹
一首　永山升
七首　松本道別

四首 巖谷行
一首 太田良一
一首 米山靜太郎
一首 近衛泉子
四首 近衛貞子
二首 蜂須賀嚴子
四一首 前田朗子
五五首 松平俊子
二一首 西四辻茂子
二首 三條幸子
六首 高崎竹
一首 小山貞子
四首 日野西廣子
一五首 鳥尾廣子
六首 保科寧子
一十首 税所敦子
六首 下田歌子
三十首 [illegible]久子
三三首 池田長子
二十首 中島歌子
二首 小倉文子
三首 光岡良子
一首 園生清子
四首 三島竹子

二首 栗原宜太郎
一首 岡田朗太郎
一首 村上秀鍐
一首 近衛光子
四七首 鍋島榮子
四〇首 柳原愛子
二首 園祥子
五首 島津輯子
一一首 何多仁子
一首 伊達濱子
一首 高崎稔子
一首 黑田體子
八首 大河內鋹子
六首 保科節子
六七首 小池道子
四六首 諏訪晴子
三首 千種任子
二首 池田敏子
四首 伊藤生子
二五首 北島以登子
五首 伊東ちせ子
六首 黑木娘子
二首 隈生はつ子
四五首 安東菊子

四首 島崎淑子
一首 平塚千代子
一首 黑石孚子
三首 小杉頂子
一首 高橋直子
四首 原田符生子
三首 片岡光子
二首 野村てふ子
一首 江崎操子
一首 三村爲にゝ子
一首 中澤信子
一首 望月元子
一首 竹內淑子
三〇首 三輪田眞佐子
一〇首 田邊和氣子
二首 鹽井ふく子
二八首 師岡須賀子
一首 柳濟子
一首 奧山照子
一首 梅澤ますみ子
三首 川口きは子
一首 濱口奈保子
一首 曲淵ひて子
一首 太田良子

二首 千々波楢子
二首 井口鶴子
一首 黑石文子
一首 高橋政子
一一首 小川昌子
一首 原田民子
二一首 西ゆた子
二首 長瀬銀子
三八首 尾崎すう子
三首 木村千代子
一〇首 小笠原艶子
一〇首 阿部鹽子
六首 服部綾子
九首 田邊龍子
四首 田邊君子
五首 鹽井てふ子
三三首 中澤のふ子
一首 玉造梢子
二〇首 澤上磯子
二首 松井たま子
三首 今水丹江子
一首 中村たゞ子
三首 山田裕子
一首 青木春子

社告

拜啓益御清健奉賀候引續き御引立を蒙り辱く深謝仕候陳は今回會計主任者左記の者に變換致候間爾後は乍御手數金錢御受拂の事は勿論會計上の御用は必下名の者へ御宛被下度此段得御意候草々敬具

國光社會計主任
澤邊祐順

明治三十年三月

國光社

三輪田眞佐子著
女子の本分
五版
●定價金二十五錢●郵稅金六錢●郵劵代用一割增

三輪田眞佐子著
女子處世論
再版
●定價金二十錢●郵稅金四錢●郵劵代用一割增

生田目經德著
雅文消息集
●定價金二十五錢●郵稅金四錢●郵劵代用一割增

富士谷御杖大人
土佐日記燈
大和綴美本　近刊

杉谷正隆編
修身百首
全一冊　近刊

發行所　東京市京橋區築地二丁目二十一番地　國光社
（電話番號本局八八）

女鑑第百三拾號目錄

社告

○代價は通貨又は郵便爲替小爲替銀行爲替及通運にて本社へ御直送之事○郵便爲替は東京銀座郵便取扱所へ御振込可被下事○郵券を以て代金に換用せらるゝ時は一割增の事○別に領收證を出さす金員領收の上は直に女鑑を發送すべし若强ひて領收證を要せらるゝ方は別に證書郵送料御送附の事○未納稅の來書は一切受取不申候事

女鑑

每月五日廿日發行

定價			廣告料
一冊	六冊(三ヶ月分)	十二冊(半年分)	五號活字廿三字詰一行金二十錢
十錢	五十五錢	壹圓	
全國無遞送料			

明治三十年五月十九日印刷
同　年五月二十日發行

編輯兼發行人　東京京橋區築地二丁目二十一番地　川崎直衛
印刷人　東京京橋區南八丁堀一丁目十一番地　並木艮雄
發行所　東京京橋區築地二丁目二十一番地　(電話番號本局八八)　國光社

(印刷所　東京國光社印刷部)

(明治廿五年三月十二日遞信省認可)